
とある鏡中の仮面騎士

バルタン星の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある鏡中の仮面騎士

【Nコード】

N5379U

【作者名】

バルタン星の人

【あらすじ】

ある日、上条当麻は自分の家でカードデッキを拾う。

それから、鏡の中に巣食う怪物の姿や、自分を執拗に追う龍が見えるようになる。

そして、「ドラゴンを探せ」という謎の声。

果たして上条を待ち受ける物とは……

原作を大事にする方、独自設定、キャラ崩壊等が苦手な方は閲覧を控えてください。

プロローグ(前書き)

別作品でギャグをやっているので、シリアスもやってみようと思いましたが。

どうかよろしくお願いします。

プロローグ

学園都市、其処は東京西部の未開拓地を一気に切り開いてつくられた、文字通り学生の街。

いくつかの学区にわかれ、230万人もの住人が暮らすこの街のもう一つの顔が、薬物投与などで人為的に超能力者をつくりだす“大能力開発機関”という顔だ。

そんな学園都市で最近噂になっているのは…

・

・

・

少女「ねえねえ！また行方不明事件だって！これで34人目だってさ〜」

夕暮れが眩しいとある学区に、携帯電話で会話しながら歩く少女。私服だが言葉遣い等から女子中学生か高校生だと思われる。

『マジで〜？超怖いよ…』

電話の声も、同年代と言って差し支えない程の言葉遣いだった。

少女「聞いた話しなただけ〜鏡の中から怪物が現れて、捕まったら鏡の中に引きずり込まれて二度と出られないんだって〜！」

怖がる素振りを見せた電話の中の友人に、わざと怖がらせるように話す少女。

『止めてよ〜アタシそついうのキライなんだから〜』

効果てきめん。思わずニヤける少女。

少女「噂だよう・わ・さ」

あくまでも噂なので信憑性ゼロだよ、という言葉をつけ加えた。

少女「じゃあまた明日」

『バイバイ』

少女「あ、そうそう」

『何?』

少女「噂の続きなんだけど、怪物を倒してくれる騎士がいるみたい。それもかなりカッコいいって」

『でも噂なんですよ?』

少女「…まあね」

『そっか……じゃあね涙子』

涙子「バイバイ」

涙子と呼ばれた少女は、会話を済まして携帯電話を切る。しかし、彼女は気付いていなかった。自身を映す、鏡の中に蠢く不気味な存在に……

・
・
先ほどまで電話をしていた少女、佐天涙子はまもなく家路に着いていた。

ようやく見えてきた我が家に少なからず安心していた。

何故なら電話を終えてから、誰かに何度も見られているような気になっていた。

気配はいずれも鏡からしていたが、覗いても当然誰もいなかった。

佐天「気のせいよね……」

鏡を見るたびにそう呟き自分を落ち着かせていた。

そしてやっと我が家を目の前にして、

ホツとした佐天は改めて歩きだそうとした時だった。

ガシッ！

佐天「きゃっ！」

突然背後から抱きつくように羽交い締めにされた。

そしてそのまま、佐天を引きずり始めた。

佐天「は、離して！」

必死にもがきながら、犯人の顔を見ようとしたが……其処には誰もいなかった。しかし、確かに誰かに掴まれて引きずられている感触がある。

いよいよ佐天の思考がパニックに陥ろうとしていた。気が付けば鏡に向かっているみたいだったが、パニック状態の佐天は気付かない。

佐天「イヤッ！誰かッ！」

人通りがない道で、佐天は来るはずもない助けを求めた…その時だった。

ブロロロ！！

ドガッ！

佐天「きゃー！」

実にタイミングよく、鏡の中から青を基調としたカスタムバイクがジャンプして何かを弾き飛ばした。その衝撃で、佐天が地面に倒される。

バイクが着地して軽くUターンし、止まる。それに乗っていたのは

……

佐天「え…？」

漆黒に包まれた騎士だった。その身に包んだ鎧は、コウモリに酷似した姿だった。

カスタムバイクを止めた騎士は、佐天のいる方角を睨み付けながら、拳を握しめている。

「グウルルル……」

佐天「へ？」

佐天のすぐ右側で獣のような唸り声が聞こえた。思わずその方角を見る。

佐天「えええええ！？」

佐天は驚愕した。

直ぐ側で倒れていたのは、イモリのような赤い怪物だったのだ。

しかも一体だけではない。鏡の中から次々と現れているではないか。

それを見た騎士がバイクのスロットルを全開に吹かす。

そして、猛スピードでバイクを走らせて怪物の一団目がけて突進した。

騎士がバイクを手足のようには操り、群がる怪物を跳ねとばしたり、乗ったままキックを放って吹き飛ばしたりで、圧倒的に戦っていた。

仕上げとばかりにバイクをその場でコマのように回転させ、囲んでいた怪物達を全員ダウンさせた。

佐天「すっい…」

啞然としていた佐天がようやく口を開く。

だが、騎士は戦闘体制を緩めていない。

バイクを再び止めた騎士が見ている方角を見ると、また怪物達が鏡から姿を現した。そのうちの何体かは、背中の巨大手裏剣を取り外

し、威嚇するように振り回している。

だが、それに怯む素振りを見せない騎士は、腰から細身の剣のような武器を引き抜いて左手に持つと、再びスロットルを全開にした。

そして片手でバイクを運転し、猛スピードで手裏剣を持った怪物の一体の胸を、すれ違い様に切り裂いた。

たまらず崩れ落ちる怪物。

バイクを止めた騎士は、その車体から降りると、剣を腰にある鞘のような部分に収めた。

騎士は怪物達に向かってゆっくり歩きだすと、腰の剣の手を保護する部分を展開させた。

次に騎士が、腰に装着しているベルトから、カードのような物を引き抜いた。

そして、カードを先ほど展開した剣の、ちょうどカードが一枚入るスペースに装填し、剣を元の形状に戻すと、カードが剣の中に隠れた。

《SWORD VENT》

電子音声が鳴った途端、鏡から大きなコウモリの怪物が、イモリの怪物を蹴散らしながら騎士の横を通り過ぎる。

すると騎士の右手には大剣が握られていた。

その大剣を両手に持ち、イモリの怪物達に向かって走りだす。

それからは、またも騎士の独壇場だった。怪物が素手であるうと、巨大手裏剣を手にしていようと、騎士の手近にいた怪物の片っ端から切り倒されていた。

残った怪物達は逃げようとしていたが、騎士に横に大きく尻ぎ払われて倒れると、その姿は跡形も無くなるようにして消滅した。

佐天「……………」

全てを目撃する結果になった佐天は、呆然として立つことも忘れていた。

どうやら怪物達は全滅したらしく、戦闘体制を解除した騎士は両手を広げ、首を上げる。

すると青く丸いエネルギーが騎士を包む。眩しさで目をつぶる佐天。

やがて光が消えた為に佐天は目を開けた。

目の前には騎士の姿は無く、代わりに全く同じ位置に全体的に黒の服装に、サングラスをした若い男が立っていた。

佐天は其処から騎士の正体を容易に絞りだした。

男「怪我は？」

近づいて声を掛けてきた男は、そのいかつい外見に似合わず優しさがある声だった。

佐天「大丈夫ですけど……………一体何が？」

ようやく立ち上がった佐天は率直な質問をした。

男「何でもない。気を失っていたんだ」

誤魔化すように静かに言うと、男は佐天に背を向けてバイクに向かった。

佐天「あ…ありがとうございます…」

何故か佐天は追及することが出来ず、ただ立ち尽くしていた。

一方、男がバイクにまたがり、サングラスを外すと同時にバイクが外見のみ変形し、何処にでもある黒いバイクになった。

そして、ヘルメットを被り、バイクを走らせてその場を去った。

佐天「ウソ…でしょ？」

自然と、呟く佐天だった……

・
・
・

陽がすっかり落ちた街で、バイクを走らせる先ほどの男。

キィィィン

と、男の耳に鏡を引っ掻くような音が小さく聞こえた途端に、バイクのスピードを速め、人通りの少ない道に入った。

男「KAMEN RIDER!」

男が呟くと、光が包み、あの騎士とカスタムバイクの姿に変わり、鏡の中へと消えて行った……………

同じ頃、ビルの鏡の中に巨大な赤い龍が身体をくねらせながら飛んでいた……………

プロローグ（後書き）

なぜドラゴンナイト×禁書目録なのか……

それは龍騎×禁書目録が既にあつた為です。

もしドラゴンナイト×禁書目録も既にあつたらごめんなさいorz

さて、不定期になると思いますが、どうか温かい目で見てください？

第1話 ドラゴンを探せ その1 (前書き)

グダグダです？

第1話 ドラゴンを探せ その1

翌日、とある高校

小萌「いいですか？これについては」

上条「はあ〜」

小学生にしか見えない女性教師の月詠小萌の授業を聞きながら、一人の生徒、上条当麻が深いため息を吐いた。

今日も何かと最悪だった。目覚ましは壊れてるわ、家で何故か生卵を踏むわ、バスに逃げられた挙げ句不良と激突して絡まれるわで見事に遅刻だった。

上条「不幸だ…」

もう自分の不幸体質には慣れてるつもりだったが、それでもやはり嫌になる。

小萌「上条ちゃん、聞いていましたか？」

上条「うわあ!？」

気が付くと自分の教師である小萌の顔が目の前にあり、周りからはクスクス笑い声が聞こえている。

上条「えと、何だったでしょう?」

小萌「聞いていなかっただんですね？明日からの土日に宿題をやってきてくださいと言っただけですよ？」

小萌がまったく、と言わんばかりの仏頂面だ。

上条「は、はい……」

上条は慌てて返事をする、また深いため息を吐いた。

・
・
・

キンコンカンコン

チャイムが鳴る中、生徒達が家路に向かったり、部活を始めたりとしている中、上条はバッグを肩のあたりに持ちながらゆっくりと門を出た。

クラスメイトの土御門等に、帰りに何処か寄らないかと誘われたが、今は行く気分ではなかったので断った。

上条「喉渇いた……」

上条は自然と自動販売機に足を運んだ。

手近の販売機に着き、お金を投入する。

そして、お目当ての飲み物のボタンを押したが……

上条「アレ？……出ないんですけど……」

上条はすぐに、販売機にお金を飲み込まれたことを察した。

上条「おい！ちょっと返してくれよ！」

必死にお金を返却しようとしたが、全く反応しない。

上条「うう不幸だ…しかも今日はいつもより…」

上条はガツクリと肩を落とす、己の生まれの不幸を呪った。

？「ちよつとアンタ」

上条「はい？」

誰かに声を掛けられ、上条は腰を落としたまま振り向いた。

振り向いた先には茶髪で制服を着た少女が、両腕を組んで仁王立ちしていた。

上条「なんだ…ビリビリ中学生か」

御坂「だーかーら！私には御坂美琴って名前があるでしょうが！」

御坂美琴と名乗った少女は、上条に向けて電撃を飛ばす。

仰け反りながらも上条は右手でガードすると、電撃は瞬く間に掻き消された。

御坂美琴は学園都市の中でも7人しかいないという、超能力者（レベル5）の内の第3位で、超電磁砲レールガンの使い手である。

一方上条当麻はというと、あらゆる異能の力を消すことが出来る、

幻想殺し（イマジンプレイカー）を右手に宿している。しかし学園都市での身体検査では計測不能である為、無能力者（レベル0）という烙印を押されている。しかも幻想殺しは、神様のご加護や運命の赤い糸といった物でさえもまとめて消してしまう、とも言われている。上条が不幸体質なのはコレが原因かもしれない。

上条「何すんだよ…」

御坂「ちゃんと名前で呼ばないからでしょうっ？それよりアンタ、お金飲み込まれたの？」

御坂がニヤけながら、上条に問い掛ける。

上条「う…」

御坂「ハハーン。凶星ね？」

御坂が益々ニヤける。

御坂「ちよつとどきなさい」

上条「まさか…」

御坂が上条をどかし、自販機の前に立つと、何やら呼吸を整え始める。

それは上条がかつて目撃していた光景と同じだった。そして…

御坂「ちえいさー！！」

勢いよく回し蹴りを自販機に放つ御坂だった……

・
・
・
数分後……

上条「疲れた……」

あの後、御坂が蹴った自販機から大量の飲み物が出てきて大変なことに
なってしまう。

結局上条は、ペットボトルのお茶を一本だけ手にして家路に着いた。

上条「それにしても、本当にお嬢様が通う常盤台中学の人なのかね
え……」

自販機に回し蹴りをした超能力者の顔を浮かべながら、上条が通う
高校の寮に到着した。

そして自分の家のドアの前に立ち、一呼吸置いてからドアを開ける。
その途端……

？「とうま遅い！」

白いシスター服の銀髪の少女が、上条のツンツンとした頭に噛み付
いた。

上条「イデデデ！……せめてお帰りなさいを言ってくれよインデック
ス」

インデックス「おふぁえりなふぁい、とうふぁ（お帰りなさい、とうま）」

インデックスと呼ばれたシスター服の少女は、噛み付きながらモガモガと上条を迎えた。

インデックスとは、10万3000冊もの魔道書を記憶しているという不思議な少女である。

その能力から、敵対する者達に狙われていたり、彼女を保護しようとする者達がいた。

そしてある事件がきっかけで、インデックスは上条の下へ同居している。

何故かは……上条自身は覚えていない。そう、上条には7月28日以前の記憶が無いのだ。

ただ、上条は生活に必要な知識などは記憶している。料理の作り方や、社会のルールやマナー、その他のことだ。

しかし自分は何故学園都市にいて、どうやってインデックスと出会い、一体何日、ヘタすれば何年過ごしていたのか、どうして不幸体質なのか、ということの記憶が綺麗さっぱりなくなっていた。

上条「ほら、ご飯できたぞ?」

インデックス「わぁゝ いただきます!」

待望の夜ご飯に、インデックスの瞳がキラキラ輝いているのが見えた。

そして勢いよく口に運び、あっという間に平らげてしまった。

上条「相変わらず早いな……」

インデックス「お代わりにくれると嬉しいな」

上条「ハイハイ……」

言われるままに、キッチンへと向かう上条だったが……

上条「ぶっ!!」

突然上条は何か足に足を引っ掛けて、まるでギャグマンガのようにつぶせに転んだ。

上条「イテテ……」

上条は日常の中でよくやることなので、慣れてはいたが……やはり痛みがツライ。

頭を押さえながら、上条は転んだ原因を探す。

上条「……?」

上条の足下にあったのは見られない物だった。

上条「…カード…デッキ?」

上条が拾ったのは、ちょうど片手で持てるサイズの黒いカードデッキだった。

中には、何処のトレーディングカードゲームでも見たことがないカードが二枚入っていた。

上条「SEAL……封印?」

一枚は、ブラックホールみたいなのが描かれているカード。
もう一枚は……

上条「CONTRACT……契約……だっけ？」

自分の知識の中にある英単語を絞りだす。

CONTRACTとあるカードには、絵柄が真っ白になっていた。

上条「なんだこりゃ？こんな物買った覚えは……ッ！？」

キィィン

捨てようかと思ったその時、鏡を引っ掻いたような音を上条の頭の中で響いてきた。

思わず頭を両手で押さえ、苦悶の表情の上条。

音は止む気配を見せず、更に上条の頭の中に語り掛けるような声が出た。

『……契約のカードだ……ドラゴンを探すんだ……』

上条「ドラ……ゴン……？」

上条は声の主に質問をするが、返事はなくやがて謎の音もしなくなつた。

上条「ハア……何だったんだ……？」

インデックス「とーま。どうしたの？」

一向に出て来ない上条を心配して、インデックスがキッチンにやって来た。

上条「ああ、大丈夫だよ。転んだだけだし」

インデックス「でもすごい汗かいているよ？」

インデックスに言われるまで気が付かなかったが、上条はひどく汗をかいていた。

上条「転んで包丁が刺さりそうになったんだ……アハハ」

インデックス「？ふーん」

上条はよくわからないごまかしをした後、インデックスにご飯のお代わりを提供した。

カードデッキは、知らず知らずのうちに上条がポケットに入れていた。

その様子を、鏡の中から赤い龍が睨み付けていた……

第1話 ドラゴンを探せ その1 (後書き)

その2へ続きます。

第1話 ドラゴンを探せ その2

翌朝：

上条「ふわあ〜よく寝た…」

朝日に照らされて、上条が起床する。

昨夜に宿題はやってはいたが、途中で眠気に勝てずに宿題中に寝てしまったのだった。

インデックスはすぐ側の布団でまだ寝ているようで、スースーと寝息の音が聞こえる。

上条「さて、朝ご飯でも作るか〜」

顔を洗い、さあ食事の準備をしようとしたその時。

キイイイン

上条「ッ!?!?」

昨日と同じ、鏡を引っ掻く音がした。

しかも今回は、出所がわかった。ベランダからだった。

上条「何なんだ…」

上条は音の原因を探る為、ベランダへ出た。

外には何の変哲もない、平和な風景が見えた。

しかし、ある一ヶ所の異変に上条が気付く。

自分の真っ正面に見えた鏡が、大きく波打っているのだ。

上条「…?」

思わずその怪現象を見つめる上条に、それは突然現れた。

「グオオオン！」

上条「!?!」

上条は驚愕した。

波打っていた鏡の中から、巨大な赤い龍が現れ、こちらに迫っているのではないか。しかも、ポケットから自然と取り出したカードデッキが発光している。

上条「うわっ！」

迫りくる龍から身体を守ろうと、咄嗟に両手で顔を隠す。

すると上条の身体が球体状のシールドみたいな物に覆われ、衝突寸前まで来ていた龍を防いだ。

「グオン！」

それを見た龍は、更に勢いをつけてシールドに体当たりして、シールドを強引に破壊した。

上条「ぐわっ！」

その衝撃に上条が横倒しになる。

なおも龍が上条に迫らんとする中、上条の頭の中から声が聞こえた。昨日と同じの、若い男の声が。

『ドラゴンを恐れちゃダメだ……契約のカードを……』

上条「クッソ…何なんだよ!?!」

ヨロヨロと立ち上がり、振り払うように叫ぶ。

その時既に龍の姿はなく、波打っていた鏡も元の鏡に戻っていた。

上条「…アレ?」

上条は自分がとうとう頭がおかしくなってしまったのではないか、
と思い始めていた頃…

インデックス「…とうま、ご飯まだ?」

いつの間にか起きていたインデックスの言葉に、ようやく我に帰っ
た。

その頃…

ジャッジメント
風紀委員、それは能力者の学生達で構成されている学園都市の治安
維持機関。

基本的には個々の学校ごとに独立し、校内の治安維持を行っている。

だが、時として学校外での治安維持も行うようになってい

た。第七学区の風紀委員本部では、一人の少女がパソコンを操作して

頭の花飾りが特徴的な少女、初春飾利はまだ誰も来ていない本部で黙々と作業をしていた。

ガチャ

そこに、茶髪でツインテールの少女が入ってくる。

初春「あ、白井さんおはようございます」

ツインテールの少女、白井黒子は常盤台中学に通う御坂美琴の後輩である。

彼女は風紀委員の中でも知られている人物だ。

白井「あら？初春이었습니다の？」

独特なお嬢様言葉を使い、初春の下へと歩み寄る。

初春「はい、ちょっと調べたいことがあって…」

白井「なんですかの？…ああ、行方不明事件のことですか…」

パソコンを覗きこんだ白井がため息と同時に呟く。

風紀委員、いやその上位組織にあたる警備員アンチスキルの現在の目の上のたんこぶが、最近続発している謎の行方不明事件だった。

原因不明、犯人不明、被害者の消息不明とわからないことだらけで、捜査も難航している状況だ。

初春「そのことなんですが……ここ数日の間に、『鏡の中から化物やそれを倒す騎士が出た』という通報が何件あるんです」

パソコンの場面に、学園都市の地図が表示され、地図上に赤い点々が何か所かに追加される。

白井「しかしそれはあくまでも噂では…」

腕を組み、初春の話しに耳を傾ける白井。

初春「確かに、その騎士の姿も黒かったり、白かったり、ピンクみたいだったとかでまるで統一していないんです」

白井「やはり噂……」

初春「ですが……」

白井「？」

初春がパソコンの操作を止め、白井の方へ向く。

初春「昨日佐天さんが言っていました。『私はついに都市伝説を目撃した!』って……」

白井「それは本当ですか？」

白井の表情が変わる。

初春「はい…なんでも黒いコウモリみたいな騎士だったって……」

・
・
・

上条「ふう…コンビニでも行くか…」

おかしくなった（と思っている）頭をリラックスさせる為に外に出たものの、やることがないのでとりあえずコンビニに行くことにした。

キィイイン

上条「ぐっ…！」

再び鳴った音に、頭痛で顔が歪む。

それでも痛みをこらえ、音のする方向を見ると…

道路を挟んで、向かいの歩道にあるビルの鏡からだった。

其処には巨大なクモの化け物が、大きな足を使って人間を鏡の中へ引きずり込む一部始終が見えた。

上条「ち、ちよつと!？」

上条は慌てて、周囲の人達の中に以上に気が付いている人がいないか探したが……

上条「…へ？」

誰も気が付いてなかった。それどころか普通の日常を送っている始

末だった。

上条「…やっぱり俺がおかしいのか？」

ついに幻覚、幻聴が…と上条は己の不幸を今日も呪い始めた。

上条「気のせいだよな…」

上条は自分にこう言い聞かせ、改めて歩を進めた。

・
・
・

御坂「もしもし…ああ黒子？」

コンビニから出て来た御坂美琴は、自分をお姉様と（必要以上に）慕う後輩からの電話に出ていた。

白井『お姉様？今は空いていますの？』

御坂「まあ、どっちかというと暇だけど…」

携帯を耳に当て、歩きながら後輩の話しを聞く御坂。

白井『実は行方不明事件で新たな進展があるかもしれないですの』

御坂「へえ」

白井『ですから、後でいいので本部に来てほしいですの』

御坂「まあいいわ。後で向かうわね」

白井『よろしくお願いしますの』

会話を終え、携帯をしまう御坂。

しかし彼女は気が付いてなかった。

というより、見えていなかったのだ。

鏡の中から御坂を付け狙う、三体のイモリの怪物の姿に……

・
・
・
上条「あれは…御坂か」

上条はコンビニに行く途中で、歩きながら携帯電話で電話している御坂とすれ違った。

本来なら声を掛けられるところだが、電話に夢中だったのかそれはなかった。

上条「アイツも忙しいんだな…」

キイイイン

またしても鏡を引つ掻く音。

上条「もう騙されないぞ…」

音を無視して行こうとしたが、今度は男の声が出た。

『あの女の子が危ない！……奴等が見えるのはキミだけだ！』

上条「え…?」

力強い声に押され、上条は鏡を見た。

其処には、先ほどすれ違った御坂を狙うイモリの怪物の姿が見えた。

上条「御坂…！」

上条は底知れない不安感を覚えた。

そして、その不安感は彼を御坂の下へ走るまでに至らせた。

・

御坂が携帯電話をしまい、路地裏に入っていくのを確認した上条。

上条「あ…！」

上条が路地裏に入ると、2体の怪物が背後から御坂に忍び寄っているのが見えた。

上条「御坂！」

思わず声を掛ける。

御坂「私に何か……ってアンタか」

怪物と一緒に振り向く御坂。

上条からすれば御坂の視界に怪物が入っているはずだが、やはり見えていないらしく、上条に声を掛けられて若干仏頂面のような様子だ。

上条「ああ、その……あっちへ行ったほうがいいぞ？」

御坂「ハア？」

怪物に睨まれる中、御坂にこの場から去るように要望するが、対する御坂は益々仏頂面になる。

御坂「どういうつもり？突然声を掛けてきて…」

上条「お、おいおい待て！」

しかも、御坂がこちらに向かって歩いてくるではないか。本人には見えていないが、当然その先には怪物がいる。

上条「チツ！」

罅が開かないと思った上条は、急に走りだして怪物達を潜り抜けて、御坂を強引に引き離れた。

ドン！

御坂「な…！」

それは所謂、“押し倒す”ということなのだが。

上条「ふゝ危ない危ない。このままお前が……」

朴念仁な上条は、自分が何をしでかしたのか分かっていない。

御坂「何すんだゴルアアア！！」

上条「い！？」

結果として、顔を真っ赤にした御坂のいつもより強力な電撃を味わう羽目になったのだった……（もちろん右手の力で防いだ）

しかも電撃が怪物を巻き込むという、思わぬ副産物を生むことになった。

上条「な、何すんだよ？」

御坂「それはこっちの台詞よッ！！」

立ち上がって怒鳴り散らす御坂。

上条「実はお前は……ぶっ！」

言い訳をしようとした上条は、背後から死んでいなかった怪物のパンチを頭にくらい、転倒した。

御坂「!？」

突然上条が倒れた為に、一瞬驚く御坂。

上条「イテテ……」

頭を触る。どうやら出血はしていないようだ。

御坂「ちよっと！何よこれ!？」

上条「御坂……!」

上条が見たのは、御坂が怪物に羽交い締めになれ、鏡に向かって強

引に引き摺られている光景だった。

御坂「一体どうなって…！」

やはり、御坂には背後にいる怪物が見えていない。

上条「マズい…！」

起き上がって助けに行こうとしたが、もう一体の怪物や、更に加わった怪物に邪魔される。

御坂「イヤッ！」

もう鏡寸前のところまで来ていた。

御坂は助けを求めて叫ぶ。

上条「御坂ア！」

手を伸ばすもむなしく、御坂は怪物ごと鏡に吸い込まれてしまった

……

・

・

・

御坂「……ココは？」

吸い込まれた御坂が見たのは、全面鏡に不可思議な空間だった。

「グウルル……」

御坂「え…？」

御坂のすぐ後ろからのつめき声と、肩を掴まれる感覚。思わず後ろを見る。

御坂「イヤアアア！」

背後にいた奇怪な姿に、御坂が悲鳴を上げた。

・
・
・

上条「！…今の御坂の…！」

御坂の悲鳴は、現実世界のうさぎからも聞こえてきた。

そして、御坂が吸い込まれた鏡が波打つと同時に、怪物が吹っ飛ばされてきた。そのまま地面に倒れ、姿が跡形もなく消滅した。

その直後、御坂を抱き抱えたサングラスに黒服の若い男が、鏡の中から現れた。

男が御坂をおろし、怪物達に向かって走りだす。

一体に向けて、回し蹴りを放つ。見事にボディを捉え、怪物をその場に倒す。

背後から接近してきた一体には、足払いで地面に仰向けに倒し、ボディを踏みつける。

上条「すげえ…！」

並の格闘家ではない動きに、暫し見とれる上条。
と、そんな上条に向かって怪物の一体が近づいてきた。

上条「うお！……まあ、幻想殺しで消えるだろ！」

上条は自分の危機を何度も救ってきた右手を伸ばし、怪物に触れる。
しかし……

上条「アレ？……効かない！？」

効果無し、それは上条を驚愕と絶望を味わわせるのに十分なものだった。

上条「ぐわっ！」

無防備な上条に、怪物のパンチが決まり上条は倒れた。

だがすぐに上条を殴った怪物は、サングラスの男に背後から蹴り飛ばされる結果になったのだが。

男の攻撃をくらった怪物達は、消滅もしくは鏡の中へと引き上げられた。

男「ふう……」

戦闘を終え、一呼吸する男。

上条「アンタすげえな！」

上条は満面の笑みで、男に近づく。

だが男は喜ぶどころか…

男「俺にデツキを渡すんだ！」

上条「へ？」

男「カードデツキを寄越せ！」

その声を荒げて上条のポケットを無理矢理探り始める。デツキかと思っ取し出したのは上条の財布だとわかると、その場に投げ捨てた。

上条「な、何だよ！」

上条は男を振り払ってこの場から走り去る。

男「おい待て！」

サングラスを外し、端正な顔立ちを露にすると、上条を追って歩き始め、呆然と立ち尽くす御坂とすれ違つ。

御坂「ね、ねえ」

御坂に声を掛けられ、歩を止める男。

そして御坂に近づき、一言だけ述べた。

男「このことは忘れた方がいい」

御坂「は？」

そう言っつて、男は去った。

御坂「……………あ、アイツのだ…届けてあげようかな…？」

側に落ちていた上条の財布を拾い、若干顔を赤くする御坂だった…

・
・
・

上条「ハア、ハア…ココまで来れば平気だろ？」

建物の影に隠れ、男をやり過ごそうとする上条。

何度か振り替えるが、男の姿はない。

上条はこのまま家に帰ってしまおうかと考えていたが…

キイイイン

すぐそばの鏡からした音に阻まれる。

しかも…

上条「んな…！」

目の前の鏡に、巨大なクモが現れていた。

咄嗟にあのカードデッキ

を取り出すと、カードデッキが発光を始めていた。

巨大なクモ“ディスプレイダー”は、鋭く大きな足で上条に襲い掛かる。

上条「うお！？」

後ろに下がって回避する上条だったが、

上条「うわっ！？」

直後に後ろに停車していた車に吸い込まれた……

男「つたく……」

その一部始終を目撃したサングラスの男は、舌打ちをしながら呟いた……

上条「何だココは……？」

上条がたどり着いたのは、先ほど御坂が引き摺り込まれた不可思議空間だった。上条は其処で自分が宙に浮いているのに気付いた。

上条「……？」

しかも上条の周囲には、球体状のシールドに覆われていた。

やがて、自分の身体が光に包まれると、高速で何処かに打ち出されるような感覚になった。

上条「うわぁ！」

上条は、車の中から飛び出してきた。
そのまま転がり、別の車に激突して止まる。

上条「イッテ……ん？」

不意に身体を触ると、ある違和感に気が付く。

何かの装甲を纏っているみたいだった。

次に全身を触る。やはり同じ感覚。

そして、おそろおそろ鏡を覗くと…

上条「嘘だろお!?!」

自分の姿が、何かの騎士に変身していたのだ。

更に自分がいる世界が鏡写しだったことにも気付いた。

そしてすぐ近くにディスプレイパイダーが迫っていた。

上条「何だこりゃ〜!!」

上条はその場から逃げることしか出来なかった…

・
・
・
男「……」

上条の変貌を見た男は、おもむろに鏡に向かって上条の物と酷似したカードデッキを左手に持ち、突き出した。

上条のそれと違うのは、デッキの中央にコウモリの紋章が組み込まれていた。

突き出したデッキが発光し、男の腰にベルトが出現した。

男「KAMEN RIDER！」

右手を下ろし、KAMEN RIDERと発声しデッキにベルトを装填する。

するとデッキが回転し、男の身体をシールドが包み込む。

シールドが消えた時、男の姿は黒い騎士、仮面ライダーウイングナイトに変わっていた。

ウイングナイトは躊躇いもなく鏡の中へと消えていった。

・
・
・

上条「不幸だああ！」

上条は自らの災難に対して怨嗟の言葉を吐いた。

今までも学園都市最強の能力者と戦ったり、魔術師と戦ったりと様々な出来事に関わってきた。

しかし、鏡の中に吸い込まれて姿が騎士になり、且つ怪物に遭遇するなんてことは考えたことはない。

必死にデイスパイダーからの追跡から逃れる為に走りまくるが……
デイスパイダーは高くジャンプして上条の前に立ちはだかった。

上条「やべえ……」

最早これまでか、と思ったその時、

ドガッ！

突然両者の間を、見たことがないマシンが横切り、ディスプレイダーを跳ねとばした。

そのマシン“ライドシューター”は、上条が見る中止まる。そして、其処からウィングナイトが降りてきて、上条の下へ歩きだす。

それを見守るように、巨大なコウモリが飛び回る。

上条「だ、誰だ？」

起き上がったディスプレイダーを睨み付けるウィングナイトに、上条が尋ねる。

ウィングナイト「俺にデッキを渡さないからだ」

上条「あ、アンタかよ……」

正体を知った上条が呟く中、ウィングナイトがデッキからカードを引き抜いた。そして、カードを腰のホルダーに収まっている召喚機“ダークバイザー”を展開し、カードをベントインする。

《SWORD VENT》

認識音声と同時に、上空から長剣“ウィングランサー”が降ってきて、ウィングナイトの右手に収まる。

ウイングナイト「下がっている…」

ウイングナイトがディスプレイパイダーに向かって走りだし、鋭い足からの一撃を防ぎながらの一進一退の攻防が始まった。

上条「ああやって使うんだ…」

ウイングナイトのやり方をまね、おそろおそろカードを引き抜く。すると左手に設置された召喚機がひとりでに展開した。やはりおそろおそろカードをベントインする。

《SWORD VENT》

認識音声の直後、細長い剣“ライドセイバー”が上空から現れ、地面に勢いよく突き刺さった。

上条「すげえ…」

一方ウイングナイトは、ディスプレイパイダーの一撃を回避するべく後ろに跳び退る。

着地したウイングナイト。すると……

上条「わああああー!!」

ライドセイバーを両手に持ち、ディスプレイパイダーに向かって走る上条（が変身した騎士）が横切った。

ウイングナイト「おい待てー!!」

ウイングナイトの制止を振り切り、上条はライドセイバーをデイスパイダーに向かって切り付けたが……

パキイーン！

上条「お、折れた！？うわっ！」

あろうことかライドセイバーはデイスパイダーの足に防がれ、簡単に折れてしまった。しかも、直後にデイスパイダーの一撃に吹き飛ばされる始末。

しかしウイングナイトが壁にぶつけることでことなきを得た（強引だったが）。

ウイングナイト「邪魔をするな！」

痛みに悶絶する上条にキツク言い放つウイングナイト。直後にカードを引き抜いてダークバイザーにベントイン。

《ADVENT》

違う認識音声が流れ、今度はウイングナイトの相棒のコウモリのモンスター“ダークウイング”が現れて、デイスパイダーに体当たりを繰り返した。

更にカードを引き抜くウイングナイト。カードにはデッキと同じ紋章が描かれていた。そしてベントイン。

《FINAL VENT》

音声が鳴るとウィングナイトは走り始める。

するとダークウィングが、ナイトの背中にくっつき、大きなマントのようになつた。

ウィングナイトがジャンプする。

ウィングナイト「ハアアア!!」

上空高く飛び上がったウィングナイトの全身をマントが包み、一つの大きなドリルになる。

そしてそのままディスプレイパイダーに真上から突進し、ディスプレイパイダーの身体が貫かれると同時に爆発を起こした。

上条「おお……」

暫く見入っていた上条だったが、着地したウィングナイトを見ると駆け寄る。

ウィングナイトはこの場を立ち去ろうとしていた。

上条「待ってくれ！ココは一体何処なんだ？それにアンタは何者なんだ？」

ウィングナイト「説明している暇はない。早く此処から去れ」

上条「はい？」

ウィングナイト「危ない！」

上条「うわっ！」

ウィングナイトが上条を強引に押す。上条はその場から転んで倒れた直後、炎が地面が直撃し爆発が起こった。

上条「な、何だ？」

ウィングナイト「あのドラゴンか…！」

空を見ると、朝に上条を襲撃した赤い龍がいた。

『上条当麻……ドラゴンを恐れちゃダメだ！』

すると上条の頭の中から声が聞こえた。

上条「今…俺の名前を…」

ウィングナイト「急げ！」

一瞬立ち止まっていたが、ウィングナイトに言われるまま、ウィングナイトについて行った。

「グオオオン!!!」

走る二人目がけて炎の弾を吐くドラゴン。

地面のあちこちで爆発と火柱が起こる。

必死に走る二人。

上条「なんで俺を追って来るんだ!?!」

走りながら愚痴を吐く上条とウイングナイトに、だめ押しとばかりに大きな炎が放たれた。

上条「うわあああ!?!」

吹き飛ばす二人を嘲笑うように、ドラゴンが吠えた……

第1話 ドラゴンを探せ その2 (後書き)

長い&amp;mp;ナ手なバトル模写ですみません？

第2話 ドラゴンとの契約 その1 (前書き)

更新が遅れて申し訳ありません？

第2話 ドラゴンとの契約 その1

ドカアアアン!!

上条「うわっ!」

爆風で吹き飛ばされ、大きく回転しながら尻餅をつく上条。一方ウイングナイトは綺麗に受け身を取っていた。

ウイングナイト「大丈夫か?」

上条「まあなんとか…」

起き上がりながら、おそらくこの鎧のような姿でなかったらかなり危ないところだった、と上条は思った。

ウイングナイト「此処を出るぞ」

上条「ど、どうやって?」

上条を誘導するように走るウイングナイトは、大きな窓の前で止まった。

ウイングナイト「窓を使って帰る」

上条「窓の中に入れるのか!?!」

ウイングナイト「モノが映る物ならなんでもな…其処で見てろ。お前に出来るか?」

ウイングナイトは何の躊躇もなく窓に飛び込むと、その身体が一瞬にして窓の中へと消えて行った。

上条「すげっ!!」

思わず歓声を上げる上条だったが、背後にはドラゴンが迫っていた。

上条「よし！俺も……」

ドガアアアン!!

上条「ぶっ!!」

突然上条の目の前で爆発が起こった。

ドラゴンが吐いた炎の弾で、窓が吹き飛んだのだ。

上条「危なかった……って窓が……」

咄嗟に横に飛んだ上条は辛うじて直撃を免れたが、帰る為の窓が粉々になってしまった。

上条「不幸だーっ!!」

自らの不運を呪いながら、別の窓を探すべく走り出す。
ドラゴンはしっかりと後を追いかけて来た。

上条「窓、窓……」

やがて駐車場へと来た上条、必死に窓を探す。

そして、上条は止まっている車を見て気付く。

上条「モノが映る物ならなんでも……ってアイツ言ってたよな……」

ドラゴンが目前に迫る。

上条「ええい自棄だ！」

上条が叫んだ直後に車に飛び込むと同時に、ドラゴンが火の弾を吐く。

間一髪上条が早く車の中へと吸い込まれ、火の弾はむなしく外れて地面に直撃した。

・
・
・

上条「うわっ！」

上条が転がり込んだ先は、いつもと変わらない日常が広がっていた。車に映る自分の姿を確認する……どうやら元の姿に戻ったようだ。

上条「助かった……のか？」

息を切らしながら立ち上がった上条は、あることに気が付いた。

上条「そういえば……アイツに逃げたって思われているかな……」

・
・

一方、窓から出てきたサングラスの男、仮面ライダーウイングナイ
トに変身していた男は……

サングラスの男「アイツ…何処に行った!？」

案の定だった……

・
・
・

御坂「黒子ゝ入るわよ？」

ドアをノックして部屋へと入る御坂。此処は白井黒子や初春飾利が
所属している風紀委員^{ジャッジメント}の本部である。

尚、御坂は上条の財布を届けようとしたが、上条が何処に行ったか
分からないので、今度会ったら渡そう、ということになった。

白井「あら、お姉様おはようございますの」

佐天「だーかーらー！私は本当に見たんです！」

初春「佐天さん落ち着いてください！」

一足先に佐天が来ていたが、何やら揉めている。おそらく佐天が目
撃したという鏡の中から現れた怪物や騎士のことだろう。

御坂「佐天落ち着いて。私だって見たし」

3人「え？」

本来なら一笑にされる話のだが、御坂は先ほどその怪物を目撃した……というより襲われたのだ。

白井「お姉様：ウソはついて……」

御坂「いないわよ？」

佐天「御坂さんも見たんですか？」

御坂「ええ。鏡の中からイモリみたいな怪物がたくさん」

その頃、鏡の中の世界で、何かが起こっていた。

その場所はウイングナイトがデイスパイダーを倒した場所……：其処に現れた何者かがデイスパイダーの残骸に向かって右腕をかざすと、黒い塊と共に残骸が結集し始めた。

やがて塊が消えると、デイスパイダーが再生して活動を再開した。しかも、上部に人型のパーツが加わった“デイスパイダー リ・ボーン”として……

？「クツクツクツ……」

その光景に満足したのか、デイスパイダーを復活させた者は姿を煙のように消して行った……

一方現実世界では、サングラスの男が黒いバイクを走らせていた。

おそらく上条を捜しているようで、辺りを見回しながら走っている。やがて男はバイクを止め、バイザーを上げると、再び見回す。其処に一人の少女が視界に入った。ジャツジメントの本部から出てきて、外にいた御坂だった。

御坂「あ……」

御坂も此方に気が付いたらしく、近づいてきた。

御坂「ちよつと、話があるんだけど……」

ブロロロ！

御坂「ちよつ……！」

御坂に詰め寄られたとたんに、男はバイザーを下ろしバイクを走らせた。

御坂「ちよつと待って！」

慌ててバイクを追い掛ける御坂。やがてバイクは路地裏に入った。其処は行き止まりになっていたが……

御坂「…アレ？」

御坂は驚いて周りを見回した。行き止まりになっている筈が、前には鏡があるだけでバイクの姿が何処にもなかったのだ。

御坂「…もう。ちょっと聞きたいことがあったのに……」

御坂は諦めてその場をUターンして行った。

直後、鏡の中に仮面ライダーウイングナイトがバイクに乗っているのが映しだされた……

・

上条「昼ご飯出来たぞ」

インデックス「わ」

場所は変わって上条が通う高校の寮の、上条の部屋では、上条とインデックスが昼ご飯を食べ始めていた。

あの後上条は財布を投げ捨てられたことを思い出し、とぼとぼ寮へと戻った。とりあえず昼ご飯の材料はあったのでそのまま昼ご飯を作ることにした……というよりは、ただのカップラーメンなのだが。

上条「今日はなんだか不幸なことだらけだ」

インデックス「いつものことでしょ？」

上条「う……」

ため息混じりの愚痴も、あっさりとインデックスに一蹴される。

上条「悪いけど、俺疲れたから寝るわ……残りは食べてよし」

インデックス「…でもとうま全然食べてないよ？」

上条「今ちよつと食欲がないんだ……」

少ししかカップラーメンを食べていなかったが、自然と眠気が襲ってきた為、布団で横になる上条。インデックスは綺麗に上条が残した分まで平らげた。

上条「眠い……」

疲れもあつたのか、そのまま眠りに落ちた上条だった……

夢の中で上条は、声を聞いていた。今朝から頭の中に聞こえる、若い男の声だ。

『上条くん。契約のカードだ……ドラゴンを探すんだ……』

こんな調子の声と、今朝に起こった出来事がフラッシュバックするという夢に、上条はうなされた……

数時間後

上条「全然眠れなかった……」

昼寝から目覚めた上条だが、夢を見たせいでこれと言っていいほど寝付けなかった。

頭を掻きながら、傍らに置いてあったカードデッキを手に取り、“契約”のカードを取り出す。

上条「“契約”のカードか……」

そして上条は、インデックスに出かけることを伝えると、外へ飛び出した。理由は自分でもわからなかったが、自然と鏡を必要以上に覗いていた。ドラゴンの気配がする度にその方向を向き、また気配を探す。こんな感じが数分間続いた。

サングラスの男「おい」

バイクを止めていたサングラスの男に声を掛けられるまでは……

上条「ま、またアンタかよ……」

サングラスの男「俺にデツキを渡せ」

サングラスを外し、最初の時と同じ要求をした。上条は敢えて挑発気味に尋ねる。

上条「契約のカードが入った？」

サングラスの男「ッ！……何処でその話しを知った!？」

男の声が荒くなり、上条に詰め寄る。

上条「あのドラゴンを……」

サングラスの男「ドラゴンには関わるな!……」

会話の途中で声を上げる男。

上条「な、何で?」

サングラスの男「あのドラゴンと契約を交わせば……ベントされるぞー!」

上条「べ、べんと?」

突然飛び出した意味不明な単語に、上条は困惑する。

サングラスの男「とにかくデツキを……」

キイイイン

そんな二人に割り込むように、鏡を引つ掻いたような音が聞こえた。

上条「この音は……」

サングラスの男「入り口が開いた。誰かの身に危険が……来い!」

音の正体をさりげなく解説した男は、上条を強引に引つ張りだした。

上条「へ?…ちよつと!?!」

・
・
・
その頃、二人がいた場所とさほど離れていない所で、一人の男性が屋台の中で料理を作っていた。其処に、デイスパイダーリ・ボーンが鏡の中から狙っていた。当然男性には自分を狙う怪物が見えていない。

デイスパイダーリ・ボーンは口から糸を発射した。

糸は男性の腕に絡み付き、男性もようやく異常に気付いた。

男性「な、何だこりゃ……?」

しかし時既に遅く、糸は更に男性の身体に絡み付き、勢いよく引きずり込もうとし始めた。

男性「うわああ！た、助けてくれええええ！！！」

男性の悲鳴を聞き、サングラスの男が走る。上条も遅れて走り出す。

そしてその後をゆっくりとつけるドラゴンが鏡の中に飛んでいた…

…

第2話 ドラゴンとの契約 その1（後書き）

その2に続きます。

これからもこんな感じで不定期に更新するかもなので、どうかよろしくお願いします。

第2話 ドラゴンとの契約 その2

男性「は、早く助けに来てくれえええ！」

物にしがみついて助けを求めて叫ぶ男性。

糸が身体全体に絡み付き、強い力で引つ張られている為に、だんだん引きずり込まれて行った。

やがて、サングラスの男と上条はやって来て男性を抑えた。

二人は必死に男性を助けるべく男性を引つ張る。

暫くして糸がちぎれ、三人は後ろに倒れた。

ディスプレイ・ボーンは諦めたようで、鏡の奥へと姿を消した。

サングラスの男「この人を頼む」

放心状態の男性を上条に任せ、鏡の前に立つ。

サングラスの男「其処を動くなよ？」

上条に忠告した男は、左手にデッキを持ち、鏡に向かって突き出した。

デッキが発光し、腰にベルトが装着される。

サングラスの男「KAMEN RIDER!!」

男がそう言つとデッキをベルトに装填した。

デッキが発光しながら回転し、男の身体を球体状のシールドが包む。

シールドが消えると男は仮面ライダーウイングナイトに変身した。
ウイングナイトは鏡の中へと突入した。

その一部始終を目撃した男性は気絶してしまった。

一方上条は暫し見とれていた。

・
・
・

ウイングナイトは異空間でライドシューターに搭乗し、鏡映しの世界を目指す。相棒のモンスターのダークウイングも後に続き、暫くして鏡映しの世界に到着した。

ビルの屋上らしき場所に着くと、ライドシューターを止め、ウイングナイトは眼前に現れたデイスパイダーリ・ボーンに向かって飛び掛かった。

そして上部にある人型のボディを鞘から抜いたダークバイザーで斬りつける。

デイスパイダーリ・ボーンは両腕からのパンチで抵抗し、ウイングナイトを無理矢理地面に降ろし、八本の脚でウイングナイトを串刺しにしようと試みる。

ウイングナイトはダークバイザーで防ぎ、本体に接近をしようとす
るが、防戦一方に追い込まれた。

・
・
・

その光景を見ていた上条は、不意に立ち上がって男がやっていたようにデッキを取り出して突き出した。

上条「KAMEN RIDER!!」

出来るだけネイティブっぽく発声したが、デッキに反応なし。

上条「(アレ?発音が悪いのかな?)……カメンライダー!!」
発音を変えて再挑戦。だが反応なし。

上条「(実は敢えて棒読み?)……カメンライダー」
棒読みで再々挑戦。やっぱり反応はなかった。

上条「アレ?おかしいな…壊れてるのか?」

『…そうじゃないんだよ。僕もやったことあるけど…』

上条「え?」

愚痴を言い始めた上条の背後から声がした。

今朝から聞こえていたあの声だった。

上条が振り向くと、其処には若い外国人がいた。

上条「だ、誰?」

キット『僕はキット・テイラーだ。上条くん、僕は何て言ってたか覚えてるかい?』

キット・テイラーと名乗った外国人は、確かに英語を話していた。しかし、上条の頭の中で日本語に変換されて聞こえてくる。

上条「何て言ってたかって……契約のカードか!？」

上条が気付いた時には、既にキットの姿はなかった。何かを察した上条はおもむろにデッキから契約のカードを取り出して、外へ出た。目の前に建つビルの窓が波打ち、ドラゴンが顔を覗かせていた。

其れを見た上条は、おそろおそろ契約のカードの絵柄をドラゴンに向けた。

・
・
・
ウイングナイト「な、何!?!」

戦闘中のウイングナイトの窓越しに見たのは、上条が何かをドラゴンに向けている光景だった。おそらく契約のカードをドラゴンに向けているにちがいない。

ウイングナイト「止せえええ!!」

急いで上条を止めようと走りだすウイングナイトだったが、途中でディスプレイ・ボーンの複数の脚に羽交い締められる。そしてそのまま引きずりだされてしまった。

・
・
・
上条「契約するぞ…!!」

上条は契約のカードを掲げると、両腕を広げて受け入れる体制になった。

上条「さあ来い!!」

するとまるで待ちわびていたように、ドラゴンが現実世界へと飛び出して上条に向かって突進した。

ドラゴンは上条の腹部へ飛び込むと、そのままどんどん上条の身体の中へと吸収されて行った。

上条にもその感触が伝わってくる。妙な感触に思わず目を閉じる上条。

上条「ッ…」

感触が消え、上条が両腕を下ろして目を開けると、何も無い暗黒の世界になっていた。

上条「此处は…?」

上条が辺りを見回す中、ドラゴンのオーラが光りながら上条の身体に覆い被さる。

すると上条の身体は今朝変身したあの騎士の姿に変わった。しかし今は何か違った。力がどどんみなぎり、各パーツが変化していた。

左手に設置された召喚機は龍の頭部を模したデザインになり、頭頂部に龍の紋章が浮かび上がる。そしてデッキにも龍の紋章が…更に身体が赤くなった。

上条「これは…」

変化した鎧を見ていると、キットの声が聞こえてきた。

キット『… 其れがこのデツキの本当の力なんだ。お願いだ。どうか
惑わされずに、その力をみんなを護る為に使ってくれ…』

キットの声と共に、目の前に自分と似た姿をした騎士が一瞬現れて
消えた……

・
・
・
ウイングナイト「クッ…！」

ウイングナイトは走り回っていた。

デイスパイダーリ・ボーンが吐き出してきた針……おそらく毒針を
避ける為に。

其れを鬱陶しいと感じたのか、デイスパイダーリ・ボーンは脚を一
本前に突き出してウイングナイトを引っ掛けた。

ウイングナイト「うおっ!?!」

運悪く引っ掛かって屋上から転落してしまふ。

ウイングナイト「うわああ！」

「グオオオン！」

あわや転落死と思われたが、ダークウイングが雄叫びと共にウイン
グナイトの背中にくつつき、翼になった。

デイスパイダーリ・ボーンは窓に張りついて毒針を発射し、ウイン
グナイトを打ち落とそうと試みる………と思いきや、すぐに糸を吐

いてウイングナイトの身体をダークウイングごとがんにがらめにした。

そのまま地面まで連行されて、ゆっくりと地面に落とされた。

ウイングナイト「クソッ…解けない…！」

身動き出来ないウイングナイトの前に降り立ったデイスパイダーリ・ポーン。

絶好の機会を逃すほどモンスターは甘くはない。

デイスパイダーリ・ポーンは毒針を三本発射した。

今度こそ終わりかと思われたが……彼は突然やって来た。

上条「ハア！セイ！タア！」

毒針を一本ずつ払い除けた赤い騎士は、紛れもなく上条が変身した騎士だった。

上条の相棒となったドラゴン ドラグレッダーも駆けつけ、デイスパイダーリ・ポーンを威嚇する。

ウイングナイト「アドベントカードを使え！」

縛られたままのウイングナイトの言葉に従い、上条は左手の召喚機を展開してデッキからカードを引き抜き、ベントイン。

《SWORD VENT》

認識音声が鳴ると上条の頭上から剣が降ってきた。

上条が其れをキャッチする。剣はドラグレッダーの尻尾に似た形状だった。

上条「よし！」

剣を構え、デイスパイダーリ・ボーンに向かって走りだす。次々と放たれる毒針を剣で断ち切り、ジャンプしてデイスパイダーリ・ボーンのボディを斬り付ける。

今度は折れない。むしろ相手に大きなダメージを与えているようだった。

上条は地面に降り立つと、二枚目のカードを引き抜いてベントインデッキの紋章が描かれたカードだった。

《FINAL VENT》

音声が鳴るとドラグレッダーが上条の周りを飛び回り始めた。

上条「はあああ……！」

上条は同時に構え、ドラグレッダーと共に空中に飛び上がる。次に大きく回転し、終わりと同時に右足を突き出しキックの体制に入る。そしてドラグレッダーが吐く炎の弾を受けて猛スピードでデイスパイダーリ・ボーンに突っ込む。

上条「だあああー！」

雄叫びと共に放たれたキックはデイスパイダーリ・ボーンの手を大爆発させるに至った。

上条「……やった……」

上条がふらふらと立ち上がり、爆発した所を見ながら呟いた。すると爆心地から何かの発光体が上昇して行くのが見えた。其れを見たドラグレッダーは発光体に向かって飛び、発光体を吸収すると、そのまま飛び去った。其れを静かに見送る上条。

ウイングナイト「…人の忠告を聞かないヤツなんだな」

いつの間にか糸を切ったウイングナイトが上条の下へ歩み寄る。

上条「…ヒドいな…助けてやったのに…」

ウイングナイトの言葉に不満を漏らす上条。

上条「…だいたいアンタ何なんだ？名前も言わないし…俺は上条当麻だ」

ウイングナイト「…仮面ライダーウイングナイトだ。変身する前は冬川ふゆかわ蓮れんだ」

上条の一言を受けて、軽く自己紹介をするウイングナイト。

上条「…じゃあ冬川さん。俺は後悔していない。この力はモンスターと戦う為に…いや、誰かを護る為に使う。例え其れが、永遠に続くことになっても…」

ウイングナイト「何…？」

上条の決意を聞いたウイングナイトは、仮面越しからでもわかるほど表情を変えていた。

ウイングナイト「…これでお前は仮面ライダードラゴンナイトだ。
満足か？」

後ろを向いて歩き出し、こう言ったウイングナイトに、上条「ドラ
ゴンナイトは黙って後ろ姿を見ていた……」

・
・
上条「仮面ライダードラゴンナイト…か」

現実世界に戻った上条は、デッキを見ながら家路を急いでいた。

公園を通りすぎ、まもなく着こうとしていた時だった。

御坂「あ、見つけたわよ」

背後から御坂に声を掛けられた。

とりあえずデッキをポケットにしまう。

上条「はあ…悪いけど今日は勘弁してくれ…」

御坂「ち、違うわよ！今日は……その…」

上条「？」

不自然に顔が赤くなっている御坂。様子がおかしい。

上条「どうした？顔赤いぞ？」

御坂「な、何でもないわよッ！」

上条「ちよつ、危ねっ!」

突然電撃を飛ばされた。上条には何がなんだかわかってない。

上条「何すんだよ!？」

御坂「ご、ごめん……じ、実はアンタ落としたでしょ?財布……」

上条「あ、そういえば……」

御坂「だ、だから拾っておいたわ……はい……」

何処かろれつが回っていない様子の御坂が、上条に財布を手渡した。

上条「サンキュー!コレ落としたからどうしようと思っていたし……」

御坂「そ、そう?」

上条は素直に喜んだ。其れを見て御坂も微笑んだ。

上条「じゃあそついうことで!」

御坂「あ、待って!」

手を振ったその場を去ろうとする上条を御坂が呼び止める。

上条「?何だ?まだ何かあるのか?」

御坂「鏡の中に何かあるの?」

上条「……」

御坂「私は、捕まるまで怪物の姿は見えなかった。アンタには最初から見えてたんでしょ？」

上条「……ああ」

御坂「…教えてくれない？」

二人は近くにあった公園のベンチに座り、上条は今朝デッキを拾ったこと、鏡の中の世界のこと、其処から現れるモンスター、そしてそれと戦う騎士のことを話した。

御坂「ふうん。じゃあアンタはこのデッキを拾ってから鏡の中に入るようになったのね？」

御坂が上条のデッキを持ちながら呟く。

上条「まあな。それで、鏡の中に入ると、なんかすごいジェット機に乗り込んだみたいになるんだ」

御坂「そのジェット機みたいのに乗るには、デッキが必要ってこと？」

上条「…大体合ってる」

カードデッキを上条に返し、御坂は次にサングラスの男「冬川蓮の話題を出した。」

御坂「あの男はアンタが手に入れる前からデツキを持ってたの？」

上条「おそろくな…あの人、冬川運つていうんだ」

御坂「…どっかで聞いた名前ね…」

上条「そうなのか？」

御坂「…多分」

こんな勘弁で会話を進めていた二人の耳に、例の“入り口が開く怪音”が聞こえてきた。

御坂「…この音…！」

上条「聞こえるのか？」

御坂「え、ええ」

上条「この近くに窓はないか？」

御坂「うーんと……」

二人は立ち上がって窓を探す。

御坂「あそこ！」

御坂が指差す先に、小さな服屋の窓があった。急いで公園を後にし、窓へと走る二人。

先の上条が窓の前に立つ。

上条「待った」

御坂「何？」

上条「ちよつと下がった方がいいかも」

御坂「何をする気？」

上条「まあ見てて」

説得の末御坂を少し下がらせ、いざデッキを取り出そうとした時だった。

白井「お姉様」

御坂「なつ黒子!？」

遠くから掛けられた声は間違いなく白井黒子のモノだった。

上条「どうした？」

御坂「急いで！何かするんでしょ？」

上条「あ、ああ」

御坂に急かされた上条は改めてデッキを左手に持って前に突き出す。デッキが発光して腰にベルトが装着された。

どうやら白井にはその光景は見えていないようで、こちらに向かつてゆっくり歩いてくる。

上条「KAMEN RIDER!!」

上条はそう言うとデッキをベルトに装填した。デッキが回転し身体を赤いシールドが包む。

上条の姿はあつという間に仮面ライダードラゴンナイトに変わった。

御坂「うそ……」

御坂はその一部始終に、終始あんぐりとしていた。

ドラゴンナイト「じゃー!」

そう言うと上条はドラゴンナイトは、窓の中へと入って行った。

御坂「カメン…ライダーって…」

・

ドラゴンナイト「待て!」

鏡の中の世界に到着したドラゴンナイトは、目の前で女性を連れて行くこうとする人型の蟹のモンスターの前に立ちはだかった。

ドラゴンナイト「その人を離せ!」

「グウルル……」

ドラゴンナイトの一言に反応した蟹のモンスター……ボルキャンサ

「は女性をイモリのモンスターに運ばせると、巨大な鋏になっている両腕を振りかざしてきた。」

・

御坂「…私にも見える…」

ドラゴンナイトとボルキヤンサーの死闘を窓の外から鑑賞している御坂に、白井がやってきた。

白井「お姉様、何を見ていますの？」

御坂「…黒子、何かおかしなモノが映ってない？」

御坂は確認も兼ねて白井に尋ねるが、白井の解答は……

白井「あゝ。また子供っぽい服を……」

御坂「ッ！」

その言葉を聞き、反射的に電撃を白井に放つ御坂だった……

・

ドラゴンナイト「クソッ！固いな……」

ボルキヤンサーはドラゴンナイトのパンチもキックも物ともせず、鋏で斬り付けてきた。

すかさず其れをかわし、状況を打開する為にカードを引き抜きベントイン。

《SWORD VENT》

現れた剣……ドラグセイバーを手に持ち、ボルキャンサーを一斬するドラゴンナイト。だが場所が甲羅にあたる背中だった為か、ドラグセイバーから振動が伝わってきた。

ドラゴンナイト「ッ！固すぎだろ!？」

ボルキャンサーはけろっとしている。

振動で思うように手が動かせないドラゴンナイトに、すかさず両腕の鉄で突くボルキャンサー。

ドラゴンナイト「うわあああ!」

たまらずドラゴンナイトは吹き飛ばされ、その場を転がった。

何とか立ち上がり、何かカードを出そうとするドラゴンナイトに、何かが横切った。それはライドシューターだった。

ドラゴンナイト「…来てくれたのか!」

ドラゴンナイトは一安心した。ウイングナイトにちがいない、そう思ったのだ。ライドシューターがボルキャンサーの前で止まり、搭乗者が姿を現す。

ドラゴンナイト「…?誰だ?」

乗っていたのは見たことのない騎士だった。そのボディは黄色く、左手には鉄が装着されていた。

ドラゴンナイト「別のライダーか？」

カードデッキとベルトがあるからには仮面ライダーなのだろう。とりあえずは一安心だ。

ドラゴンナイト「ちょうどいいな。一緒に戦って……」

ガシィ！

ドラゴンナイト「ぶっ！？」

謎の仮面ライダーから右ストレートをくらい、ドラゴンナイトは目を疑った。

更にライダーは、右足からのキックをドラゴンナイトに放った。

ドラゴンナイト「待て待て！何すんだよ！？」

何が何だかわからないドラゴンナイト。その背後にボルキャンサーが迫る。

ドラゴンナイト「またお前か！」

すかさずボルキャンサーをドラグセイバーで一斬。しかしその間にライダーは左手に装着されている剣をドラゴンナイトに向かって突き出してきた。

ドラゴンナイト「わっ！」

ドラグセイバーで何とか防ぎ、つばぜり合いになった。

ドラゴンナイト「俺は上条当麻だ！アンタも仮面ライダーなんだから！？」

とりあえずこの間に説得しようとしたが……

謎の仮面ライダー「黙って戦え！」

こう一蹴され、引き離された。

ボルキャンサーはまたも背後から迫り、ドラゴンナイトを斬り付ける。

ドラゴンナイト「何なんだよ!？」

理由がわからず混乱するドラゴンナイト。襲いかかってくるライダーを足払いで転倒させ、その場を去ろうとする。しかしボルキャンサーに行き止まりに追い詰められてしまった。

そして、ライダーがドラゴンナイトの前に立つ。先程からの連携攻撃に、ドラゴンナイトは最悪の疑問を口にした。

ドラゴンナイト「まさか……モンスターと仲間なのか!？」

謎の仮面ライダー「ハアツ!！」

ドラゴンナイトの疑問を無視し、左手の鍔を突き出して突進してくるライダーだった……

第2話 ドラゴンとの契約 その2（後書き）

蟹さん出てきましたね…はい。

次は他にやっている作品をまず更新したいので……すみませんが
また遅れるかもです？

第3話 仮面ライダーインサイザー その1 (前書き)

更新が長らく遅れてしまい、本当にすみませんでしたっ！

第3話 仮面ライダーインサイザー その1

ドラゴンナイト「ちょっと待ってくれよ！味方じゃないのかよ!？」

謎の仮面ライダーに何度も攻撃を受けても、なおも説得を続けるドラゴンナイト。しかし、相手は聞く耳持たずと言わんばかりに無視して攻撃の手を緩めなかった。更にボルキャンサーとの連携もあり、ドラゴンナイトは手も足も出ない状況になっていた。

・
・
・
ブロロロオ!!

そんなドラゴンナイトの危機を知ってか知らずか、黒いバイクで疾走する冬川蓮。向かってる先はドラゴンナイトと謎の仮面ライダーの戦闘場所である。

階段の上を走行する等、ヘタをすれば捕まりかねない運転で、目的地へと急ぐ冬川。

暫くしてついに戦闘場所にたどり着いた。バイクを止め、手近にある鏡を探す。するとすぐ近くに看板らしき物があった。鏡映しになっているので変身するには問題ない。

冬川は看板の前に立ち、カードデッキを取り出して看板に向かって突き出す。いよいよ変身………というところで冬川が看板に写る光景を見て止まった。

冬川「……」

謎の仮面ライダー『ほら!どうした!?!』

『ドラゴンナイト』うわっ!』

冬川にのみ聞こえてくる声、そしてドラゴンナイトと謎の仮面ライダーの姿を見て、冬川は完全に変身の体制をやめて成り行きを見守るようにした。

・

ドラゴンナイト「はあ、はあ……」

謎の仮面ライダー「へっへっへ……」

既に息が上がっているドラゴンナイトに対し、仮面越しからでもわかる余裕の表情の謎の仮面ライダー。一旦距離を取ったかと思うと、右手でデッキからカードを引き抜いた。そしてそのまま展開した左腕の鍔にカードを入れ、ベントイン。

《STRIKE VENT》

認識音声が鳴ると謎のライダーの右腕に巨大な鍔が装着された。左腕の鍔と合わせて、まさに蟹のようになった。

謎の仮面ライダー「オラア!」

ライダーはそのまま勢いよく右腕の巨大な鍔でドラゴンナイトに向かって何度も斬り付けた。ドラゴンナイトのボディは直撃し、火花が散った。

ドラゴンナイト「うわっ!!!」

強烈な一撃に、ドラゴンナイトは地面を無様に転がった。

ドラゴンナイトが起き上がると同時に謎の仮面ライダーは、剣を開閉させ、

謎の仮面ライダー「もう一発くらいいたいか？」

ドラゴンナイト「ま、またにするよ……」

挑発も気にせず、ドラゴンナイトはちょうど後ろにあった鏡に向かって飛び込み姿を消した。

・
・
・
上条「ひどい目に会った……」

現実世界に戻って一言、上条は愚痴を吐いた。幸いにも目立ったケガはしておらず、ふらつきながらもその場を去った。同時に、一部始終を見ていた冬川も上条に気付かれることなくその場を後にした。

それから暫くして、先ほどの謎の仮面ライダーが現実世界へと戻ってきた。ライダーは両手を広げると、身体がオレンジの光に包まれた。その光が消えると、ライダーの姿は一人の男へと変わっていた。

男「はあ…もつと楽に稼げる方法はねえのかよ…?」

愚痴をこぼし、腰のあたりを触りながらその場をダルそうに歩いていった……

・

・
- 公園 -

白井「……は！此処は何処！？わたくしは誰ですの！？」

御坂「ふざけるのもいい加減にしなさいよ？」

公園のベンチの上で跳ね起きた白井を、御坂は呆れながらも缶ジュースを一本手渡した。

白井「あ、ありがとうございます……」

あの後白井は、御坂が咄嗟に飛ばした電撃をくらい、ギャグマンガのような感電をして気絶してしまった。頭を抱えた御坂は、ちょうど近くにあった公園のベンチに寝かせることにした。

白井「……あ！先程は失礼いたしましたっ！！」

白井は自らの不手際を思い出し、深々と頭を下げた。

御坂「もういいわよ。それより黒子、アンタ何してたの？」

御坂は自分の分の缶ジュースを一口飲むと、白井に尋ねた。

白井「ああ、実は例の行方不明事件に関する目撃情報がないか聞き込みをしていましたの」

御坂「ふう〜ん……」

御坂は心の中で、“アイツも案外、ていうかかなり関わってそうだ

けど……今黒子に言うべきなのか……”と呟いた。

・
・
・
- 同時刻、公園前 -

御坂と白井が会話しているすぐ近くだった。謎のライダーに変身していた若い男が気だるそうに歩いていた。年は二十代前半だろうか、今どきのファッションに身を包み、その服も高価な物ばかりで、さらには香水の香りが漂う、裕福な家庭の感じがする男だった。

そんな男が、懐から携帯電話を取り出して誰かと通話を始めた。

『やあ、蟹江雅史君、何かあったのかい？』

男は蟹江雅史と通話しているのは、声色から察するに中年の男性だった。その口調からは、どうやら家族関係の人物ではないようだ。

蟹江「何かあったじゃねえよ！腰も痛いし頭も痛い。これじゃ身が持たないね！」

『だったら働くか？クレープ屋で』

蟹江「じよ、冗談じゃない！」

『約束を忘れたのか？』

蟹江「……」

何故二人がこのようなやり取りをしているのか、それは数日前まで

さかのぼることになる。

・
・
・
- 数日前、蟹江邸前 -

学園都市の中でも、多数のセレブが住むという住宅街。あちこちの住宅を見ると、確かに庶民が住むにはちよつと豪華な雰囲気のものばかりだった。そんな住宅街の中でも一際豪華な建物の前に、一台の車が走ってきた。これまた一般人が買うには気が引ける高級車だった。

蟹江「あのプレーは最高だったよな！」

運転しているのは、この高級車と豪華な自宅を持つ蟹江雅史だった。彼の父親は学園都市でもわりと有名なセレブで、息子の雅史はその恩恵も受けて自由気ままに暮らしていた。一人暮らしなのに執事やらメイドがいるだけで、その片鱗がわかる。

友人A「だよな」

友人B「でも審判のおかげで全てチャラになったけどな」

同乗しているのは二人の友人。蟹江と同じく遊び人である。

そんな三人を乗せた高級車は、蟹江の家の門の前で止まった。門の前に立ちほだかるように、スーツ姿の中年男性が立っていたからだった。

蟹江「おいオッサン。邪魔だから退いてくれる？」

強気の蟹江は、とつとと邪魔なオッサンを追い出そうとするが、オッサンもとい中年男性は眉一つ動かさず、運転席の蟹江へ近づいてきた。

北原「蟹江雅史くん、車から降りろ。顧問弁護士きたはらの北原だ」

北原と名乗った中年男性。蟹江は顧問弁護士の言葉を聞き、顔色が少し変わる。

蟹江「ふざけるな。俺の車だ」

だがあくまでも強気の姿勢を見せる蟹江。しかし次に告げられた言葉に、暫くかたまることになる。

北原「もうキミのじゃない。家にも入れない」

蟹江「何言ってるんだ？此処は俺の家だ！」

さすがにイタズラにしてはたちが悪い、と思つた蟹江は声を荒げる。一方二名の友人は、成り行きを見守る構え。助け船など出しそうにもない。北原は更に眉一つ動かさないまま続けた。

北原「正確に言えばキミのお父さんの物だ。出て行って欲しいそう
だ」

蟹江「……」

自分の父親の言葉を聞き、いよいよ言い返せなくなった。

北原「キミのことは聞いた。“役立たずで、身の程知らずな、怠け者。せつかく学園都市に来てレベル0”とな」

友人B「当たってるじゃねえか！」

友人A「アツハハハ！」

友人二名も完全にバカにし始めた。

蟹江「…降りろ！早く車から降りろ！」

友人A「ハイハイ」

友人B「じゃあな雅史」

半ばキレ気味になった蟹江は、友人二名を追い出すように車から降りた。

北原「ドライブしながら話そう」

北原の提案に渋々了承し、近くに停めてあった北原の車の助手席に乗り込んだ。

- ・
- ・
- 数分後、北原の車の車内 -

北原「お父さんは自力でキミに申し上がって欲しがってる」

蟹江「つまり、援助は一切無しってか!？」

比較的通行量が控えめな道路を走る白い車。その車内で北原と蟹江が会話していた。

北原「まずは己を知ることだ。辛い時ほど本性が見えてくる。つまりお父さんは早くキミを一人前にしたいのさ」

蟹江「なんだって？あんな、俺が欲しがってる物を全部くれたのは親父だ！」

前方を見ながら今回の一件の詳細を語る北原に、自分の父親のことを誰よりもよく知っている蟹江が反論した。

北原「確かに、出来すぎかもな。だがお父さんが決めたことだ。私は何も出来ない」

蟹江「クソツ！……ツイてねえ……」

やけになって窓の外を見る蟹江、既に頭の中は真っ白になっていた。やがて車は学園都市でも人通りの多い場所に着き、あるところで止まった。降りる北原に続いて蟹江も降りる。蟹江はある光景を目にした。

“クレープ、どの味も一つ200円”と貼られたクレープの屋台だった。

蟹江「何だありゃ？」

何故ここに案内されたかわからない蟹江。

北原「明日は我が身かもな？」

蟹江「な、冗談じゃない！」

訳を理解し、狼狽する蟹江に、北原は続けて尋ねた。

北原「武術は出来ると聞いたが？」

蟹江「女の気を引けるからな」

武術を心得てる人が怒りそうな理由でも、北原はやはり眉一つ動かさず、蟹江にある物を手渡す。

何かのマークが黄色で描かれた、手のひらサイズの黒いカードデッキ。蟹江がそれを手に取ると、デッキが光り始めた。

蟹江「すっげえ！」

蟹江はデッキを見て、子どものような目になった。

北原「キミの仕事道具だ。コレで取引しよう」

蟹江「いいぜ！」

北原「よし、これでキミは仮面ライダーインサイザーだ」

ふと笑みを浮かべる北原。しかし蟹江は気が付いていなかった。鏡に映る北原の姿が、奇怪な怪人になっていることに……

・
-そして現在-

蟹江「わかったよ！ちょっと愚痴を言ってみただけだ！」

北原『ならばよし』

蟹江は通話を終わると、携帯電話を懐に閉まった。

蟹江「……………」

ふと、若い女性が横切り、思わず立ち止まって声を掛けそうになったが、今までナンパに使ってきた高級車は無いことを思い出し、サングラスをかけ、再び歩き出した。

蟹江「絶対に稼いでやる！」

自分にこう言い聞かせながら……………

・
・
・
-同時刻、とあるビルの屋上-

学園都市の何処かにあるビルの屋上、そこに冬川蓮がいた。黒いタンクトップ姿で、鍛えられた二の腕が見える。そして、手には長い棒。

冬川「……………」

冬川が呼吸を整え、構えた。

冬川「ハア！」

一声が上がると、冬川は巧みな棒術を繰り出した。それを繰り返し、脚技も交えながら何度も何度も。その動きは、達人とでも言えそうな物だった。

冬川「KAMEM RIDER!!！」

更に、仮面ライダーウイングナイトに変身すると、動きがより激しくなった。

・
・
・

・ 同時刻、第七学区風紀委員本部

白井「ただいまですの〜」

御坂「おじゃまします〜す」

初春「あ、白井さんお帰りなさい。御坂さんようこそ」

ふらふらで戻ってきた白井と、後に続く御坂を初春が出迎えた。

初春「どうでしたか？」

白井「全ッ然駄目ですの〜。目撃情報なんてからっきしですの〜」

白井は今にも倒れそうだった。

御坂「まったく……ほら黒子、少し休んだら？」

そんな後輩に頭を抱えながら、御坂は近くにある休憩室を指差した。

白井「お言葉に甘えて〜」

白井は吸い込まれるように休憩室へと入って行った。

初春「白井さんどうしたんですか？」

自分の席に座った初春は、御坂に訳を尋ねた。

御坂「聞き込みしてたら、何か能力者のひつたくりにたまたま遭遇しちゃってね、黒子ったら意外にてこずったらしくて……」

用意された椅子に座り、頭を掻きながら答える御坂。

初春「そうだったんですか〜。大変ですよね〜」

初春は苦笑いを浮かべながら言った。

初春「……あ、そうだ御坂さん。白井さんが戻ってきたら伝えておいて欲しいことがあるんですけど……」

御坂「何か用事があるの？」

初春「はい。佐天さんと待ち合わせしてるんです」

御坂の指摘に再び苦笑いの初春。

御坂「そうなんだ…で、伝えて欲しいことって何？」

初春「コレを見てください」

初春が御坂に自分のパソコンの画面を見せた。どうやら何かの掲示板のようだ。

初春「“行方不明事件について何か知ってませんか？”って打って見たらいくつか返事があったんですけど……」

御坂「どれどれ…」

御坂が画面を見ると、回答の中に、“似たような事件があった”というのが目に付いた。

初春「海外の話しなんですけど、アメリカで数年前に似たような行方不明事件があったみたいなんです……」

御坂「え？」

初春「事件の状況、目撃者の有無、犯人はモンスター説となんだかこっちで起きてることとそっくりですよね？」

御坂「確かに…」

初春の言葉に頷く御坂。最後に初春が続けた。

初春「それに、“カメンライダー”っていう騎士がかなり関わっているって……」

上条「やべー遅くなっちゃった！」

もうすぐ日が落ち始める頃、上条は家路を急いでいた。理由は簡単、遅くなると同居人のインデックスにぎゃーぎゃー言われるからである。

しかし、上条にはまだ帰宅出来るはずがなかった。後ろにこっそりと、蟹江雅史がつけていたのだから……
キイイーン……

上条「!?!?……こんな時に……って」

上条の耳に、“鏡の入り口が開く音”が聞こえ、上条は大雑把であるが辺りを見回す。すると目の前の窓に、先程襲撃してきた謎のライダー、仮面ライダーインサイザーが立っているのが見えた。

インサイザーはこちらを指差すと、挑発するように手招きをし、鏡の中へと消えて行った。

上条「アイツ……今度こそ！」

上条は憤慨しながらも、インサイザーの挑発に敢えてのることにした。

周りに誰もいないのを確認し、カードデッキを窓に向けて突き出す。デッキが光り、腰にベルトが装着される。

上条「KAMEM RIDER!!」

デッキをベルトに装填し、上条の姿は仮面ライダードラゴンナイトへと変わった。

ドラゴンナイト」よじー」

右手の拳を握りしめ、勢いよく窓の中へと入っていくドラゴンナイトだった。

第3話 仮面ライダーインサイザー その1（後書き）

その2は出来る限り早く完成させたいと思います。どうかお待ちください？

第3話 仮面ライダーインサイザー その2

上条が変身したドラゴンナイトがたどり着いたのは、荒れ果てた工場らしき場所だった。おそらく現実世界にでも誰もいないだろう。

そう考えながら、奥へと歩くドラゴンナイト。比較的広い部屋に入ると、果たしてそこにインサイザーが立っていた。あちこちに積み荷や配剤などが散乱しており、人が歩くにはなかなか危ない。

ドラゴンナイト「戦う前に教えてくれ。何で俺を狙うんだ？」

こちらに気付いて振り向いたインサイザーに対し、まずは質問。もしかすると無視して襲いかかってくるのでは？と思っただが、インサイザーは意外にもあっさりと答えた。

インサイザー「俺が欲しい物をお前が持つてるからさ」

ドラゴンナイト「それは何だよ？」

ドラゴンナイトは、自分の所有物に狙われるレベルの物はないか考えた。これまでの経験から、もしかしてインデックス！？と一瞬思ったが、相手に悟られないように再度尋ねる。だが相手の解答は、ドラゴンナイトの予想の斜め上に行くモノだった。

インサイザー「一億円だよ」

ドラゴンナイト「な、なんだって!？」

これには驚くしかない。一億円など、一般人には宝くじで当てるく

らしいか入手する方法はない。ましてやドラゴンナイト「上条はただ高校生である。だがインサイザーはその後は続けず、デッキからカードを引き抜いて、鋏型の召喚器にベントイン。

《STRIKE VENT》

インサイザーの右腕に、ボルキャンサーの鋏を模した巨大な鋏が装備された。

インサイザー「ハアッ！」

インサイザーは無防備なドラゴンナイトに向かって飛び掛かり、巨大鋏を勢いよく振り下ろした。

・
・
・
- 同時刻、とあるビルの屋上 -

冬川蓮は、何かの気配を察知していた。何処かから聞こえてくる鏡の中の入り口が開く音……やがて僅かではあるが上条の声が聞こえ始めた。同時に上条のでも、モンスターでもない声も聞こえ始めると、冬川はタンクトップの上に上着をはおって走り始めた。

・
・
・
インサイザー「ホラホラア！」

ドラゴンナイト「ぐわっ!!」

インサイザーの両腕の鋏による連続攻撃に、たちまち劣勢に陥るド

ラゴンナイト。ついには積み荷の上に倒されてしまった。

インサイザー「どうしたどうした!?!」

起き上がる隙など与えないとばかりにインサイザーが迫る。

ドラゴンナイト「そっちがその気なら……!!」

なんとか鉄による串刺し攻撃を転がってかわし、咄嗟に引き抜いたカードをベントイン。

《GUARD VENT》

認識音声が鳴ると同時に立ち上がるドラゴンナイト。直後に右腕の鉄を突き出すインサイザー。

思わず両手でガードする体制をとるドラゴンナイト。するとドラゴンナイトの右手にドラグレッダーの胴体の一部を模した盾が装備された。

インサイザー「うお!?!」

どうやら盾の防御力は思った以上にあっただらしく、インサイザーは仰け反った。

ドラゴンナイト「よし……!!」

ドラゴンナイトは盾を構えたまま走りだす。インサイザーはすぐに体制を立て直して鉄の攻撃を再開したが、ドラゴンナイトの盾にこごとく防がれた。

インサイザーは一旦距離を取り、構え直す。

ドラゴンナイト「一億円なんて……俺がそんな金持ちに見えるか！？」

この隙にドラゴンナイトは自分のことを何処かの金持ちの御曹司と間違えているのではと思い尋ねた。

だがインサイザーの解答は、ドラゴンナイトの予想とは大きく異なっていた。

インサイザー「確かに！せいぜい時給200円くらいしか稼げない貧乏学生だな……！」

ドラゴンナイト「な……！」

これにはさすがに怒るドラゴンナイト。インサイザーは続ける。

インサイザー「一人につき一億！お前らクズ共を倒せば報酬が貰えるのさ……！」

こう言った直後、インサイザーはドラゴンナイトに向かって走りだした。

咄嗟に盾を構えるドラゴンナイトだったが、2つの鉄の同時攻撃を受け、盾を落としてしまった。

インサイザー「ハアッ！」

チャンスとばかりにインサイザーは右腕の鉄でドラゴンナイトの胴体を突く。

ドラゴンナイト「うわあああっ……！」

ドラゴンナイトは大きく吹っ飛ばされ、積み荷に激突、積み荷は雪崩が起きたように崩れ落ちた。

インサイザー「ハッハッハッ！もうお終いかあ？」

余裕を見せて挑発するインサイザー。

ドラゴンナイト「はあ…はあ…」

ドラゴンナイトは何とか立ち上がり、インサイザーに向かって少しずつ歩きだした。

・
・
・

ブロロロオ！！

その頃現実世界では、冬川が黒いバイクで爆走していた。目指す方向は、ドラゴンナイトとインサイザーが戦っている場所だ。冬川は一旦裏通りに入ると、窓の前でバイクを止めた。まだ戦闘場所からは遠いはずだが、冬川は構わずデツキを窓の前に突き出す。

冬川「KAMEN RIDER！！」

ベルトにデツキを装填すると、そのままアクセルを全開にして窓の中へバイクごと入って行った。

現実世界と鏡映しの世界の間空間に来た冬川。冬川の姿は光に包まれ、仮面ライダーウイングナイトへと変わった。その直後、黒い

バイクもまるで変形ロボットのように外見が変形していった。
変形が終わるとウイングナイトは再びアクセル全開で鏡映しの世界
を目指して走りだした。

・
・
・

インサイザー「どうしたどうした？」

インサイザーの挑発に耳を貸さず、カードを引き抜いてベントイン
するドラゴンナイト。

《STRIKE VENT》

認識音声が鳴るとドラゴンナイトの右腕に、ドラグレッダーの頭部
を模した武器が装着された。

ドラゴンナイト「(アレ?これって……)」

ドラゴンナイトはその武器を見て、何処かで見たような気になっ
たが、今はそんなことを考えている場合ではない。

インサイザー「チィ…!」

何かを感じたのか、インサイザーもカードを引き抜き、召喚器にベ
ントインした。

《GUARD VENT》

ドラゴンナイト「はぁぁぁ……!」

ドラゴンナイトが打撃武器を構えると、ドラグレッダーが現れて口元から火が出し始めた。

一方インサイザーには、左手の召喚器に盾が装備されていた。

ドラゴンナイト「ハアッ!!」

ドラゴンナイトが勢いよく打撃武器をインサイザーに向かって突き出すと、ドラグレッダーが火炎弾をインサイザーに放った。

対するインサイザーは、盾を構えて対抗したが、火炎弾の衝撃が強かったのか、大きく吹っ飛ばされた。

ドラゴンナイト「(すげえ…)」

あまりの威力に感心しつつも、ドラゴンナイトはすぐに言った。

ドラゴンナイト「このくらいで止めておかないか？アンタに聞いたことが山程あるんだ！」

インサイザー「チィ！」

吹っ飛ばされて倒れていたインサイザーは、ドラゴンナイトの提案を無視して飛び掛かった。その直後だった。

ウイングナイト「ハア！」

何処からともなくやって来たウイングナイトが飛び蹴りを放ち、インサイザーを転落させたのだ。

ドラゴンナイト「来てくれたのか!？」

ようやく現れたウイングナイトに、ドラゴンナイトは一安心した。ウイングナイトは流れるような格闘術で、インサイザーを圧倒していく。それを見たドラゴンナイトもウイングナイト側に加わった。

完全に窮地に立たされたインサイザー。片方の攻撃を防ぐが、もう一人からの攻撃は避けきれない。

インサイザー「待った待った！」

急に両手を広げて無抵抗のサインを示したインサイザーに、思わず二人は動きを止めた。

インサイザー「2対1なんて……フェアじゃねえ！不公平だ！」

そう言うときささと歩いて鏡の中へと消えて行ってしまった。

ドラゴンナイト「……なあ、どうすんだ？」

どうしたらいいかわからず、ウイングナイトに尋ねるドラゴンナイト。

ウイングナイトは少し考えたような仕草を見せると、ドラゴンナイトに顔を向けてこう言った。

ウイングナイト「…お前を巻き込みたくなかったが、こうなった以上は仕方がない。まず戦い方を覚える……ついて来るか？」

既に歩きながら尋ねるウイングナイトに、ドラゴンナイトは少々困惑気味になった。

ドラゴンナイト「い、いきなり何なんだよ……？」

とりあえずついて行くことにした……

・
・
・
-とある広場-

二人が着いた先は、現実世界ならば一通りが多いはずの広場だった。

ウイングナイト「まずは基本の一騎打ちからだ」

向かい合って対峙する二人の仮面ライダー。

ドラゴンナイト「そんなことより質問に答えて」

ガッ!!

近づいて来たドラゴンナイトを、右ストレートで殴り飛ばすウイングナイト。

ドラゴンナイト「!?!？」

ウイングナイト「訓練は必要ないか!?!？」

続いて召喚器であるダークバイザーで斬り掛かるウイングナイト。
ドラゴンナイトは何とか避けた。

ウイングナイト「どうした!?!?本気で来い!!」

ドラゴンナイト「マジで戦うのかよ!？」

ウイングナイトの攻撃を躲し、手探りながらもカードをベントインするドラゴンナイト。それを見たウイングナイトもカードを取り出した。

《SWORD VENT》

《TRICK VENT》

ドラグセイバーを手にウイングナイトに向かって斬り掛かるドラゴンナイト。

捉えた!と思ったドラゴンナイトだったが……突然ウイングナイトが真つ二つに別れるように二人に増えたではないか。

しかもそれだけではない。三人、四人、五人……どんどん分身の術の如く増えていった。

ドラゴンナイト「んな……!こんなの汚いぞ!」

最終的にはウイングナイトは八人に増えて、ドラゴンナイトは囲まれてしまった。

ウイングナイト「……………行くぞ!」

それが号令のように、八人のウイングナイトはあちこちからドラゴンナイトを横切るように斬り付けた。ドラゴンナイトはどれが本物かわからず、一方的になっっていた。

ウイングナイト「こっちだ!」

ウイングナイト「甘いな！」

ウイングナイト「何処を見ている？」

ウイングナイト「敵が一人とは限らないぞ！」

各方面から浴びせられた罵声とも言えるウイングナイト達の一言に、ドラゴンナイトは混乱の極みに達した。

ドラゴンナイト「く、クソ……うおおお！！！」

やけくそになって一人のウイングナイトに斬り掛かるドラゴンナイトだった……

・
・
- 数十分後、とある学校の寮 -

すっかり陽も落ちた寮の上条の部屋で、インデックスが腹の音を鳴らしながら、上条の帰りを待っていた。

ちっとも帰って来ない上条に、インデックスは来たら頭から噛み付いてやるうと考えていた。そんなインデックスの耳に、玄関のドアが開く音が聞こえた。咄嗟に玄関に向かって走り、噛み付く準備体制に入る。いよいよその時……と思った時だった。

バタッ

上条が疲れ果てた表情を浮かべながら、玄関に上がると倒れ込んで寝息まで立ててしまった。

インデックス「ちょっととつま！？まだ夜ご飯もまだなんだよ！？」
インデックスが必死に上条の身体を揺するが、上条は結局朝まで起きなかった。

上条「あの野郎……訓練とか言っ**て**ボコボコに**し**やが**っ**て……」

と寝言を言いながら……

第3話 仮面ライダーインサイザー その2（後書き）

そう言えば時間軸を言っていなかったなので、ここで言います。

基本的にはパラレルです。原作で言うなら、第三時世界大戦の後ですが、「作者によって都合良く改造された大戦後の世界」と思ってくればけっこうです（おい）。

第4話 ライダーへの挑戦 その1（前書き）

皆さん大変長らくお待たせいたしました？続きです。

第4話 ライダーへの挑戦 その1

- 夜、とある学区内 -

人通りが殆どなくなった夜のとある学区内に、一人の男子高校生が歩いていった。金髪にサングラスと、目立つ格好のこの高校生は、上条のクラスメイトであり、よくつるんでいる仲の土御門つちみがどもとはる元春だ。

土御門は携帯電話を片手に会話しており、更にもう片方の手には何かが握られているようだが、暗くてよく見えない。

土御門「うん。やっぱりコレは極秘に作られたあのデッキに間違いない……わかった。後で掛け直す」

そう言うと土御門は、携帯電話を切り、ポケットにしまった。

そしてちょうど、街灯の光が土御門を照らし、もう片方の手に握られていた物が見えた。それは何かの紋章が描かれた、カードが何枚か入っているカードデッキだった……

土御門「それにしても、こんな物が本当に」

？「あるんだよ？」

土御門「!？」

背後から自分の独り言に続けて聞こえてきた声に、土御門は驚いて振り向く。そこにいたのは……

・
・
- 翌朝、とある高校 -

月曜日になり、付近は通学する生徒で溢れていた。やがてほぼ全員が高校正門に入り、チャイムが鳴って数分後…

上条「不幸だーっ！」

自らの不幸を呪う叫びをあげ、最後に正門に入った上条だった。当然遅刻である。だが、彼に降り掛かる不幸はこんな物では収まらなかった。

上条「(ゲツ！…宿題やってねえ……)」

それは、学校に着いてすぐに気が付いた……

何故上条は遅刻した挙げ句宿題もやっていなかったのか、それは一昨日と昨日までの3つの出来事にある。

1つ！土曜日に仮面ライダードラゴンナイトとなり、モンスターと戦った！

2つ！日曜日に仮面ライダーインサイザーに襲われ、更に仮面ライダーウイングナイトと特訓をした！

そして3つ！そんなこんなでお疲れ状態の身体で帰宅直後に爆睡、目覚ましも入れ忘れてしまっていたからなのだ！！

・
・

上条「はあ〜……」

上条は朝からボロボロだった。遅刻をしたので担任である月詠小萌に怒られるは、宿題も忘れたのでまた怒られるは、クラスメイトである吹寄制理ふきよせいりにも何故か怒られるのは午前中だった。

青髪ピアス「お〜いカミヤん」

そして今、休み時間になり、よくつるんでいる仲のクラスメイト、青髪ピアスに絡まれている。

上条「…なんだよ？」

青髪ピアス「お前はいいよなあ…小萌センサーに怒られて…」

上条「ハア…」

青髪ピアスの変態チックな発言に、上条は聞き慣れているようなため息を吐いた。

因みに上条、青髪ピアス、そして土御門の3人はクラス内で「クラスの3バカ(デルタフォース)」などと呼ばれている。

青髪ピアス「ああ、ボキユだったらどんなシチュエーションでもええんやで〜!」

上条「はいはい…」

エセ関西弁を使えて変態発言をする青髪ピアスに、上条は一蹴する

かのように聞き流した。

上条「そういえば…土御門は休みか？」

このまま聞き流しても埒があかないので、上条は今日来ていない土御門の話題に変えた。

青髪ピアス「なんか、風邪ひいたってさ」

上条「そうか…」

そんな会話をしている最中に、まだ休み時間は終わっていないのに関わらず、小萌が教室に入ってきた。しかし見た目は完全に小学生にしか見えない身長の子供が、その姿に気付いていない生徒もいる。

小萌「はい。一端席に着いてくださいなのですよ？」

担任の声が聞こえてようやくクラスメイト全員が席に着いた。

青髪ピアスは何だかいやらしい目で小萌を見つめている。

そんなことも気にしていないように、小萌は教卓に上がると真剣な表情で話し始めた。

小萌「…えっと、皆さんもわかっているかと思いますが、“最近誰かが行方不明になったり消えたりしている事件が起きていて不安だ”と言う声が多いということなので…今日は午前中授業になりま

す」

上条「何でまた早く終わったんだ…？」

普段なら夕方あたりにならないと見られない下校する生徒の中に交じって家路に着く上条。

何だかわけがわからないが、とりあえず早く帰れるので「安心…と」
いうわけにもいかなかった。

冬川「待ってたぞ？」

側にバイクを止めた冬川が、腕組みをしながら上条を待ち構えていた。

上条「あ…」

昨日の特訓を思い出し、すぐに回れ右をしたくなる上条。

冬川「特訓の続きをするぞ？」

上条「マジかよ…」

冬川「アイツにまた襲われたらどうするんだ？」

アイツとは、昨日までに二度も上条に襲い掛かってきたインサイザ
ーのことである。

上条「なあ、ちょっと待ってくれ。場所を変えよう」

現在二人が会話している歩道は、上条が通う高校の生徒が多数歩い

ており、誰かに聞かれたらマズいと思ったのだ。

冬川「わかった」

これには冬川も了承し、二人は歩き始めた。

上条「なあ、そろそろ教えてくれないか？何であの仮面ライダーは俺達を狙うんだ？」

バイクを押しして歩く冬川と、随伴する上条。上条は人通りが減ったところで質問を始めた。

其れに歩みを止めた冬川。上条も反射的に歩くを止める。

冬川「…仮面ライダーは元々学園都市に現れたモンスターを撃退する為に、極秘裏に開発された物だ」

上条「…」

冬川「だがある日殆どのカードデッキが学園都市中にばらまかれ、お前やあのライダー…インサイザーの手に渡った」

上条「なるほど…じゃあ、返さなきゃいけないな…」

冬川の言葉を聞いて、自然とカードデッキを取り出す上条。

冬川「返す必要はない。他の仮面ライダーやモンスターの襲撃から護る為にはな」

上条「…待ってくれ。仮面ライダーって全部で何人いるんだ？」

冬川「俺とお前や、インサイザーを含めて…13人だ」

上条「んな…」

予想以上の数に、上条は面食らった。

キイイイン…

二人「!?!」

そんな重要な会話の中にでも、モンスターの出現を知らせる音が聞こえた。

冬川「…昨日の成果を試す時だな」

上条「練習試合ってどこか…?」

そう呟くと二人は、鏡を目指して歩き始めた……

・
・
・
- 鏡の世界 -

先ほど二人がいた場所の鏡写しの世界、其処に二台のライドシューターが到着した。降りてきたのは二人が変身した仮面ライダードラゴンナイトとウイングナイトだった。

ドラゴンナイト「何処だ?」

ウイングナイト「上だ!」

ウイングナイトの言葉を聞き上を見ると、ちょうど二人が立っていた目の前にあつた螺旋階段の最上階に、モンスターらしき影がこちらを睨み付けており、すぐに奥へと消えて行つた。

ドラゴンナイト「逃がすか！」

ドラゴンナイトが真つ先に螺旋階段を駆け上がった。

ウイングナイト「油断するなよ？」

ウイングナイトも後に続いて螺旋階段を上り始めた。

ドラゴンナイト「かくれんぼのつもりか…？」

最初に最上階へと到達したドラゴンナイトは辺りを見回す。意外と広い屋上だつた。だがモンスターは見当たらない。

ドラゴンナイト「逃げたのか？」

しかし……

ガシィ！

ドラゴンナイト「うわっ！」

ドラゴンナイトは突然背後から引つ張られ、仰向けに倒れた。急いで起き上がると、こちらを睨み付けるカミキリムシ型の赤いモンスター、“テラバイター”がいた。

ドラゴンナイト「イッテゝな！」

すぐに立て直し、テラバイターに向かってパンチを放つドラゴンナイト。

テラバイター「グウルルル…」

だが全てのパンチが、テラバイターにことごとくガードされてしまった。

ウイングナイト「大丈夫か!？」

其処にウイングナイトが加わり、テラバイターが挟まれる格好になった。

ドラゴンナイト「ハアッ！」

ウイングナイト「フンッ！」

ドラゴンナイトのキックと、ウイングナイトのダークバイザーによる斬撃が繰り出された。

だがテラバイターは二人の攻撃を読み切ったかのようにガードで防ぐと、逆にドラゴンナイトにキックを、ウイングナイトにはパンチを放って二人を後退させた。

ドラゴンナイト「ちよっ、アイツ強くないですか!？」

ウイングナイト「距離を取るぞ！」

一端体制を立て直すべく、二人はテラバイターから一步離れた。

しかしテラバイターは其れを見て、背中から巨大な三日月状の刃を取り外した。

ドラゴンナイト「何だありゃ？」

ウイングナイト「来るぞ！」

ウイングナイトの言葉通り、テラバイターが刃を二人に向かって投げつけて来た。

ウイングナイト「ッ！」

ドラゴンナイト「イデッ！」

ウイングナイトは辛うじて避け、テラバイターに近づくがドラゴンナイトはまともに食らってボディに火花が散った。
しかも……

ブンブンブン…

ドラゴンナイト「うわっ!？」

ウイングナイト「チッ！」

二人の背後から空気を切る音が聞こえてきたかと思うと、刃が戻ってきて完全に無防備な二人を切って行き、テラバイターの手元に戻ってきた。刃はブーメランだったのだ。

ドラゴンナイト「そんなのありかよ……」

ウイングナイトがテラバイターと切り結んでいる間に、ドラゴンナイトはデッキからカードを取り出してベントイン。

《SWORD VENT》

右手に剣を装備してテラバイターに向かって斬り掛かるドラゴンナイト。だがテラバイターは巧みにブーメランを剣の代わりに使い、逆に二人のライダーにダメージを与えて行った。

ドラゴンナイト「どうすりゃいいんだよー!?!」

テラバイターとのつばぜり合いになったが、押し負けそうになっているドラゴンナイトが叫んだ。

ウイングナイト「こうなったら……耳を塞げ!」

そう言うとウイングナイトはデッキからカードを取り出し、ダークバイザーにベントインした。

《NASTY VENT》

認識音声が鳴ると、上空からウイングナイトの契約モンスター、ダークウイングが飛んで来た。

ダークウイング「キイイイン!」

ダークウイングは雄叫びと共に頭部から超音波を放ちながらテラバイターに接近し始めた。

テラバイター「ゲウウウウ!？」

突然の超音波による奇襲につばぜり合いを止めて、両耳を抑えて苦しむテラバイター。

ドラゴンナイト「超音波かよっ!」

同じく両耳を抑えてうずくまるドラゴンナイト。

ダークウイングは暫くすると飛び去って行った。

ドラゴンナイト「よし今だ!」

まだ苦しんでいるテラバイターを見て、今度は立ち上がったドラゴンナイトがカードを召喚器にベントインした。

《ADVENT》

認識音声が鳴ると、ドラゴンナイトの契約モンスターであるドラグレッダーが上空より飛来し、口から火炎弾を放った。

テラバイター「ゲウウッ!」

火炎弾はテラバイターに直撃し、テラバイターは大きく吹っ飛ばされた。

其れを見て二人のライダーは同時にカードをベントイン。

《FINAL VENT》

《FINAL VENT》

ドラゴンナイト「ハアアア……!!」

ドラゴンナイトが構えを取ると、ドラグレッダーはまとわりつくように飛び回る。

ウイングナイト「ハア！」

一方ウイングナイトはジャンプすると、再びダークウイングが飛来し、ウイングナイトの背中に合体した。

ドラゴンナイト「ハアッ！」

ドラゴンナイトも大きくジャンプし、一回転してからキックの体制に入る。

ウイングナイト「ハアアアッ！」

続いて飛び上がっていたウイングナイトが降下体制に入ると、急に勢いが増して身体をマント状になったダークウイングが包み込んで巨大なドリルになり、テラバイターに向かって突っ込んだ。

ドラゴンナイト「ダアアアッ!!」

ドラゴンナイトもドラグレッダーが吐く火炎弾に包まれて、急降下キックをテラバイターに放つ。

テラバイター「ギアアアア!!」

ダブルライダーの必殺技を食らったテラバイターは、大爆発をして果てた。

ドラゴンナイト「ハア…疲れた……」

戦いが終わり、疲れた仕草を見せるドラゴンナイト。

ウイングナイト「…仮面ライダーは、アレより遥かに手強いぞ？カードについて学べ。覚えるべきことはたくさんある」

一方疲れた仕草を見せないウイングナイトが、ドラゴンナイトに向かって静かに告げた。

・
・
・
- 同時刻、風紀委員本部 -

御坂「まさか…学校が早く終わるなんてね……」

白井「全くですの〜。逆に風紀委員の仕事時間が増えましたの〜」

風紀委員の本部にやってきたのは、御坂と白井の二人だ。

本来ならばこの時間はまだ学校の授業のはずなのだが、行方不明事件が止まないどころか増えて来ている為に、二人が通う常盤台中学は、“生徒は寮で待機し、やむを得ず外出する場合は注意して外出するように”との勧告を受けたのだ。そして風紀委員である白井は当然風紀委員として治安維持に勤める羽目になったのだ。因みに御坂は前述の勧告により、“やむを得ず”外出しているということになる。

白井「仕方ありませんわね……それにしても、まさか同じことがアメリカでも起きてるなんて……」

御坂「しかも、カメンライダーって言う騎士が怪物を退治していたという話……なんか今回流れてる噂と似てくない？」

白井と会話しながら、御坂は同時にこう考えていた。

御坂「（アイツ……確か変身する時に『カメンライダー』って言うってなかったっけ……まさかね……）」

・
・
・
-とある学区内にある事務所-

大きな鏡がある事務所内、机にはいかにも弁護士かなんかが使いそうな品々がディスプレイされている。やがて鏡が大きく波打ち、中から北原が出てきた。

ネクタイを整え、椅子に座ると電話が鳴った。北原はすぐに出る。

北原「……もしもし？」

蟹江「北原さんか？俺だ」

電話の相手は仮面ライダーインサイザーこと蟹江雅史だった。

北原「蟹江くんか。どうした？」

蟹江『なあ…やっぱり無理かも…』

蟹江は弱気なのか、声が小さい。しかし北原は眉一つ動かさず、更に即座に言った。

北原「そうか、ちょうど近くでビル清掃のアルバイトを募集していたぞ？」

蟹江『いやあ、辞めるとは言ってない！』

とたんに蟹江が慌てた口調になる。

蟹江『まさか二人の仮面ライダーが相手だなんて聞いてなかったんだ…』

北原「賢くやれ。二人を仲違いさせればいい」

蟹江『でもよ……うわぁマズい！掛け直す！』

突然蟹江が電話を切ってしまった。

北原「全く…使えんな」

北原は若干強めの口調で呟くと、その姿を一瞬にして怪物の姿へと変化させて行った……………

・
・
・
同時刻、第七学区のとある場所

携帯電話を切った蟹江が必死に走って向かった先は、自分のバイクを暫く停めていた歩道だった。

バイクは金色の高級モデルで、蟹江の趣味がわかる。

蟹江「待つてくれよ！」

しかし運悪く二人の警備員アンチスキルに見つかって調べられていた。

蟹江「頼むよ…勘弁してくれよ！」

何故蟹江が必死なのか、それは蟹江が以前にも駐車違反などで取り締まりを受け、あと一回違反したら免許証を取り上げられてしまうからだった。

警備員は蟹江がバイクの持ち主だとわかると、女性の警備員一人が近づいてきた。

警備員「違法駐車じゃん」

蟹江「そこをなんとか……」

警備員「ダメだ。免許証を見せるじゃん」

観念したのか、蟹江は黙って免許証を語尾が独特な女性の警備員に見せた。

警備員「…あ、もう終わりじゃん？」

蟹江「げ……」

警備員「ま、決まりは決まりじゃん」

蟹江「ち、ちょっと停めていただけさ！どつやって帰ればいいんだよ！？」

蟹江の弁解もむなしく、免許証取り消しをくらうことになったのだ
った……

・
・
・
・とある高校の寮・

上条「ソードベント、ストライクベント、ガードベント……」

上条は寮の自室で、カードデッキに入っていたアドベントカードを全て取り出していた。そして其れを一通り覚えるべく、一枚一枚確認していた。

尚、インデックスはというと、昼ご飯を食べさせた後は昼寝を始め、現在爆睡中。

上条「それにしても、今さらカードを覚えるだなんて……」

カードをテーブルの上に置き、座りながら背伸びをする上条。

上条「…あ、そうだ」

ふと、上条の頭の中で何かが閃いたようだ。

上条「あの必殺技…せっかくだから名前でも付けるか」

テーブルの上に置いてあるファイナルベントのカードを手に持ち、必殺技の様子を脳内再生する。

上条「…“ドラゴンライダーキック”ってのはどうかな？」

しかしこの一言は当然、誰も聞いていないのだが。

上条「…うん。我ながら中々いい名前になった」

しかしそんなことは気にせず、自己満足に浸ってカードをデッキにしまう上条。

キイイイン……

上条「!?!」

するとまた妙なタイミングでモンスター出現を知らせる音が上条の頭の中で響いた。

上条「じゃ、行きますか……」

寝ているインデックスを起こさないように、外出の準備を始める上条だった。

・

・

・

- 同時刻、とある歩道 -

蟹江「ああツイてねえな……」

歩道にあつたベンチに腰掛け、蟹江は途方に暮れていた。もうバイクはレッカー車に持って行かれてしまった。

キイイイン……

蟹江「!」

しかしそんな蟹江の耳に、一攫千金のチャンスを示らせる音が聞こえて来た。

蟹江「…今度こそ一億円だ!」

蟹江はベンチから立ち上がると、気持ちを新たに、音のする方角へ歩き始めた。

・
・
・

キイイイン……

冬川「!?!」

この音はバイクを走らせていた冬川にも届いていた。冬川はバイクを180度方向転換させると、音のする方角へアクセルを全開させた。

こうして三人のライダーが同時に動き始めた。

第4話 ライダーへの挑戦 その2

- 第七学区のとある歩道 -

白井「それで……貴方は調理している時に、背後から蜘蛛の糸が出てきて巻き付いてきたと……」

まだ昼頃だというのに人通りが少なくなってしまった歩道に、白井と御坂が一人の男性に聞き込みをしていた。

調査の為に外に出ていた二人は、偶々行方不明事件に巻き込まれそうになったという男性から話しを聞くことが出来た。

現在はその聞き込みに真つ最中である。

男性「そうなんだ。しかも、蜘蛛の糸みたいなモノはすごい勢いで俺を引つ張ったんだ」

白井「……」

御坂「……」

男性の口から出たのは、にわかには信じがたい話だった。

だが二人は、熱心に男性の話を聞いていた。何故かと言うと、何を隠そう御坂本人も巻き込まれそうになっていて、その話を白井も聞いていたからだ

御坂「…あ……」

腕組みをしながら話を聞いていた御坂はふと前方を見て、遠くで冬川が窓の前に立っているのが見えた。

男性「それで…あのまま鏡の中に引きずり込まれそうになったんだけど…誰かが助けしてくれたんだ」

白井「…それは誰ですか？」

男性「若い男で黒い服にサングラスだったからよくわかんなかったけど…」

その黒服にサングラスの男が、御坂の視界に入っている。

男性「突然そのサングラスの男が…変わったんだ」

白井「変わった？」

男性「光に包まれて、何かの騎士みたいだね…」

ちょうど同じタイミングで、冬川は仮面ライダーウイングナイトに変身した。（もちろん男性と白井は話に集中していて見ていない）

御坂「…」

御坂の意識は完全に窓の中へ消えたウイングナイトの方へと集中していた。

ウイングナイトはダークバイザーを手に何かと戦っているようで、窓の中を行ったり来たりしていた。

白井「お姉様？おねーさま？」

こちら側の話に耳を傾けていない御坂に、白井が呼び掛けるが御坂はまだ気付かない。

白井「おねーさま!？」

御坂「…えっ？」

ようやく気付いた御坂が、真横にいる白井の方へ身体を向ける。

白井「帰りますわよ?……では、お話聞かせていただいております。うございしました」

白井は男性に軽くお辞儀をすると、まだ事態を把握仕切れていない御坂を引っ張って、足早にその場を去った。

御坂「ちよつと黒子!？」

白井「途中まではお姉様の話と酷似しておりましたが、後半から全ツ然信じられない話でしたわ!」

白井は半分呆れていた。対する御坂は話を聞いていなかったせいで何のことやらさっぱりである。

白井「大体目の前で人が騎士の姿に変身したなんて……子供向けのヒーロー番組ですか!？」

御坂「ねえ黒子!？」

白井はぶつぶつ言いながらぶんすかぶんすか歩いて行った……

・
・
・
- 数分後 -

上条「確か……この辺だったな……」

モンスターの気配がする現場に到着した上条。しかし気配はすでに消えていた。とりあえず辺りを見回す上条。すると……

冬川「遅かったな」

上条「あ……」

窓から出てきた冬川に、上条は面食らった。

上条「もしかして……もう……」

冬川「ああ。終わった」

上条「なんだ……」

冬川の報告を聞き、ガクツとする上条。

上条「じゃあ出番なしだったかな？」

冬川「それもそうだ………？」

急に向かい合っていた冬川が、上を見上げて顔を強ばらせた。

上条「?……どうし」

冬川「(隠れる!)」

冬川が小声で叫ぶと同時に、素早く上条と共に影に隠れた。

上条「な、何する」

冬川「(静かにしろ)」

冬川は上条の一言を遮ると、ちょうど上条の背後にあった階段の二階部分を指差した。

上条も指差す方向を見ると、そこには辺りをキョロキョロする若い男……蟹江雅史だった。

上条「(?!…誰だ?)」

冬川「(仮面ライダーインサイザーだ)」

上条「(インサイザーって……蟹のヤツか!?)」

小声で会話しながら上条は、先日二度も襲撃してきたライダーの姿を脳内で浮かべた。

上条「(でも……何でわかるんだ?)」

冬川「(俺の勘だ)」

上条「（へ？）」

思わず呆気にとられる上条。冬川は蟹江に気付かれないように立ち上がると、上条に手招きし始めた。

冬川「行くぞ。ついてこい」

・

蟹江「おかしいな…誰もいねえ…」

下に自分が狙っている“賞金首”がいるとも知らず、蟹江は周囲を見回していた。

蟹江「別の所か…？」

そう呟くと蟹江は、現在いる場所から回れ右をして奥に向かって歩き始めた。

蟹江「ん？」

ちようど窓がある吹き抜けらしき場所に着いた蟹江が見たのは、まるで待ち構えていたかのように目の前に立っていた上条だった。

蟹江「何だ？待ち伏せってヤツか？」

上条「…話し合いじゃ無理っばいしな」

蟹江「んじゃやるか？」

不良が喧嘩する時のあいさつのように上条に近づいてくる蟹江。

冬川「……………」

そんな時に、蟹江の背後から冬川が歩いてきた。

蟹江「おいおい…また、二人がかりかあ？」

蟹江は冬川に気が付いたようで、後ろを向いた。

蟹江「二人で一人の仮面ライダーってか？」

上条「一人でやれるさ」

やる気をなくしたかのような蟹江を見て上条が一步前に出た。

冬川「引っ込んでろ」

上条「え？ちよっと待って…話が…」

冬川「俺とお前で、一騎討ちだ」

しかし上条にとっては予定外の事態が起きた。冬川がデツキを蟹江に見せて一騎討ちするように促したのだ。

蟹江「…フン。上等だぜ」

蟹江もそれにのり、二人は窓の前に並び立った。対する上条は置いてきぼりをくらってしまった。

蟹江「行くぜ？」

冬川「…始めるぞ」

二人は同時にカードデッキを前に突き出した。
デッキが光り、二人の腰にベルトが装着される。

冬川「KAMEN RIDER!!」

蟹江「KAMEN RIDER!!」

これまた二人は同時にデッキをベルトに装填した。

デッキが光りながら回転し、二人の身体も光に包まれる。

冬川は青い光だったが、蟹江はオレンジの光だった。

そして光は消え、冬川はウィングナイトに、蟹江はインサイザーへの変身を完了させた。

二人のライダーは一瞬目を合わせると、やはり同時に窓の中へと消えて行った。

上条「おいおい…」

上条は最後までポカーンと見つめていた。仕方なく窓から見える戦いを観戦することにした。

・
・
・

ウィングナイトとインサイザーは、戦う場所にちょうどいい場所に

着くと向かい合って対峙していた。

ウイングナイト「……」

インサイザー「格好いいねえ。一億円にちょうどいいな」

構えるウイングナイトを見て、右手で指差して余裕を見せるインサイザー。

この男にはウイングナイトのことがただの賞金首にしか見えていないようだ。

ウイングナイト「行くぞ？」

インサイザー「とつとと片付けてやる！」

二人は走りだし、剣と鋏のぶつかり合いが始まった。

両者互角の勝負、ウイングナイトのダークバイザーが懐に入るや否や、インサイザーが召喚器も兼ねた左腕の鋏で受け止め、インサイザーが放ったカウンターパンチをウイングナイトが後ろに飛んで躲す。

現実世界で観戦している上条も、この戦いに見入っていた。

インサイザー「この野郎！」

ウイングナイト「ッ！」

ウイングナイトがフェンシングの技のようにダークバイザーを突き出したのを躲したインサイザーは、そのまま素早くウイングナイト

の背後に回り込み、ウイングナイトの首を締めた。

インサイザー「さあ！一億円いただくぞ!？」

ウイングナイト「グッ…!」

インサイザーは勝利を確信し、首を締める力を強める。

しかしウイングナイトがこっそりとカードをベントインしていたのに気が付いていなかった。

《NASTY VENT》

ダークウイング「キイイイン!」

認識音声が鳴ると、上空からダークウイングが超音波を発射しながら飛来した。

インサイザー「うおっ!？」

超音波を聞いたインサイザーは両耳を塞ぎ苦しみ始め、その隙にウイングナイトは脱出した。

上条「おお…!」

思わず声をあげた上条。

ダークウイングが去り、二人のライダーは再び向かい合った。

インサイザー「超音波かよ……!」

ウイングナイト「どうだ？」

インサイザー「ふざけやがって！」

インサイザーが左腕の鉄を振り上げながら突進してきた。

ウイングナイト「フン！」

それを、後ろへ飛んで躲すウイングナイト。再びカードを引き抜いてベントイン。

《SWORD VENT》

ダークバイザーを鞘に収め、空から降ってきた長剣を手に走りだすウイングナイト。

ウイングナイト「ハア！」

すれ違い様にインサイザーを斬り付ける。

インサイザー「この……」

ウイングナイト「ハアッ！」

怒るインサイザーのパンチを軽く躲し、長剣を突き立てる。

インサイザー「グアッ！」

ボディに火花を散らしたインサイザーは吹っ飛び、壁に背中を激突させた。

インサイザー「チィ！」

負けじとインサイザーもカードをベントイン。

《STRIKE VENT》

インサイザーの右腕に巨大な鋏が装着され、左の鋏も合わせて完全装備になった。

しかしウイングナイトは怯まずに長剣を構え走りだし、インサイザーも走りだす。

ウイングナイト「ハアッ！」

ウイングナイトが再び長剣を突き立てる。しかし今度はインサイザーの右腕の鋏に弾かれた。

インサイザー「ホラアッ！」

そして左腕の鋏でウイングナイトのボディを何度も斬り付けた。

インサイザー「どうしたあ!？」

更に右腕の鋏で斬り付ける。

ウイングナイト「クッ…！」

インサイザー「とどめだあ！」

インサイザーはウイングナイトの足を引っ掛けてバランスを崩させ、とどめとばかりに右腕の鍔を開き、ウイングナイトの首を挟み切るうとした。だがウイングナイトが間一髪長剣で受け止めた。

インサイザー「お前のおかげで金持ちになれるぜ……」

インサイザーはまだ残っている左腕の鍔で、ウイングナイトを狙おうとしたが………

ウイングナイト「悪いがごめんだな！」

左手で長剣を持っていたウイングナイトが、右手ダークバイザーを鞘から引き抜いて、インサイザーのボディを思い切り斬り付けたのだ。

インサイザー「グワッ！」

思わぬカウンター攻撃に、インサイザーは火花を散らしながら後退して柱に激突した。

ウイングナイトはダークバイザーを再び鞘に収めると、カードを引き抜いた。

《FINAL VENT》

インサイザー「なっ……！」

カードを見たインサイザーは、急ぎ同じカードをベントインした。

《FINAL VENT》

ウイングナイト「ハアアア……！」

長剣を手に、飛来したダークウイングが背中に合体、走りだすウイングナイト。

インサイザー「へッ！」

一方インサイザーの背後に、契約モンスターであるボルキャンサーが地面から沸き上がるように出現した。

ウイングナイト「ハアッ！」

ウイングナイトが高くジャンプし、身体がマントになったダークウイングに包まれる。

インサイザー「ハアッ！」

インサイザーもジャンプする。するとボルキャンサーが両腕の巨大な鋏で、インサイザーを打ち上げた。そしてインサイザーはそのまま回転を始めた。

ウイングナイト「ハアアアッ……！」

インサイザー「オラアアアッ……！」

ウイングナイトの全身が巨大なドリルになり、対するインサイザーの身体が高速回転しながらボール状になった。

やがて両者は空中で激突し、大爆発が起こった。

上条「どっちが勝ったんだ!？」

激突した瞬間を見た上条は、結果が気になって窓の中を注視した。

ウイングナイト「グッ……!!」

最初に姿を見せたのは、空中から落ちてきたウイングナイトだった。

インサイザー「グワッ……!!」

ほぼ同時にインサイザーも空中から落ちてきて、地面を転がった。

上条「引き分けか……?」

両者はしばらく地面に倒れていたが、ヨロヨロしながら最初に立ち上がったのは……

インサイザー「まだまだあ……」

インサイザーだった。しかし、それは突然やって来た。

ボルキャンサー「グウウウ……!!」

インサイザー「何だ?」

先ほどまで平然としていた自分の契約モンスターが、急に苦しみだした。思わず背後を振り向く。

ボルキャンサー「グワアア……!!」

見るとボルキャンサーの身体が、歪みながら粒子状に消え始め、やがて完全に消滅してしまった。

インサイザー「い、一体何が……」

何が何だかわからず、戸惑うインサイザー。しかし異変はすぐに彼も下にもやって来た。

インサイザー「お、おいおいおい！ちょっと待て！！まだ終わってない！！」

インサイザーの身体も、徐々に粒子化し始めた。其れを見てパニックになるインサイザー。

上条「な……」

一方上条は、インサイザーを襲った異変に驚きを隠せなかった。

インサイザー「何だこりゃ！？お、おい！俺はまだ戦える！！」

ウイングナイト「……！！」

ウイングナイトはその光景に目を背けた。その間にも身体が消滅していくインサイザー。

インサイザー「どうなってるんだ！？なあ頼むよ！こんなフェアじゃねえ！！ママァ！」

インサイザーの思考はもはや混乱の頂点に達していた。しかし、そ

んな彼に突き付けられたのは……………

インサイザー「だ、誰か助けしてくれえええ……………!!」

完全に消滅という運命だった……………

上条「う、嘘だろ……？」

一部始終を見た上条は、茫然自失となっていた。

インサイザーが消滅した場所には、彼のカードデッキだけが落ちていた。

ウイングナイト「…インサイザー……………」

こう呟きながら、デッキを回収するウイングナイトだった。

・
・
・
冬川「……………」

上条「あ！なあちよつと!?!」

現実世界へ戻って来た冬川に、上条が駆け寄る。

上条「なあ…アイツはどうなったんだ？」

率直な疑問を、冬川に投げ掛けた。

冬川「アイツはベントされた……」

上条「べ、ベント?」

階段を降りながら冬川は真剣に答えた。

冬川「転送されたんだ。二つの空間の間……アドベント空間に……」

上条「そ、そうなんだ……」

気丈に振る舞う上条。

上条「なあ……いつ戻れるんだ?」

転送されたのなら、死んではないということだ。どうか戻れて欲しい、そう思った。だが……

冬川「戻れない」

上条「えっ……?」

上条の希望は、儚くも崩れ去った。

冬川「だから戦いには負けられない!!」

顔を強ばらせ、声を荒げた。

上条「あ、待ってくれ!!」

冬川が急にその場から歩みを早めた。後を追う上条。

ブロロロ！

しかし冬川は振り向くことはなく、バイクに乗ってあっという間に去って行った。

上条「待ってくれ！」

上条は再び呼び止めようとしたが、バイクは速度を緩めなかった。

上条「……」

上条はしばらく立ち尽くしていたが、寮に戻らないといけない為にやがて歩き始めた。

そんな上条は気が付いていなかった。

まるで上条を見つめているかのように、一台の赤いバイクが停まっていた。バイクの上には男が乗っており、ヘルメットも赤で、顔はわからない。

バイクは上条が歩き出すと同時に、別方向に向かって走り始めた。

・
・
・

冬川「……」

冬川は、何処かのビルの屋上に来ていた。

その手にはインサイザーのカードデッキがあり、其れを見つめていた。

冬川「……」

悲しげな表情を浮かべた冬川は暫し、屋上からの景色を見つめていた。

・
・
・

- 上条の寮 -

インデックス「ねえとーま、どうしたの？」

帰ってきた上条は、インデックスの呼び掛けにも応じず、自分の布団にうつ伏せに寝転がりインサイザーが消滅していく様を脳内に浮かべていた。

インデックス「……もう！噛み付く」

インデックスは、途中で言うのを止めてしまった。

枕に付けていたものの、僅かに見えた上条の顔が、あまりにも悲しげな表情だったからだ。

インデックス「……………」

インデックスは黙ってその場から離れた。

上条「クソ…何やってるんだよ俺は…」

キイイイン……

更にうづくまつた上条だが、彼に休むことは許されていない。

上条「もう嫌だ……」

両耳を塞ぎ拒否する上条。

キイイイン……

だが、音は上条が戦うのを催促するように強くなって行った。

上条「……行くしかないのか……？」

だがこのまま無視すれば、また誰かがモンスターに襲われるかもしれない。上条はゆっくり立ち上がり、しまつてあつたカードデッキを手に外へ出ようとする。

インデックス「とーま、何処に行くの？」

そこにインデックスが目の前に立ちふさがつた。

上条「……ちよつと出掛けてくる」

インデックス「……さっきも行ってきたよね？」

上条「……」

インデックスの指摘に、上条は言葉を詰まらせた。

インデックス「ねえ……」

上条「あ！後ろ！」

インデックス「え？」

上条は突然大声でインデックスの後ろを指差した為、インデックスは思わず背後を振り向く。

しかし、当然のごとく背後には何もなかった。

インデックス「何もない……って……」

インデックスは上条がいたはずの方へ向き直したが、上条の姿はいつの間にか消えていた。

インデックス「とーま？」

インデックスのすぐ横にあった鏡が、大きく波打っていた……

・
・
・
鏡の世界を疾走するライドシューター。もちろん現実世界の一般人には見る事が出来ない。

しかし窓の前に停まっていたあの赤いバイクのドライバーには、その姿がはっきりと見えていた。

バイクの男「アレがドラゴンナイトか……」

そう呟くと、バイクの男は一息入れると、内側ポケットから何かを取り出した。

其れを窓に向かって突き出す。取り出したのはカードデッキだった。色は緑で、中央にはバッファローの紋章が組み込まれていた。

バイクの男「KAMEN RIDER!!」

バイクの男が叫んだ瞬間、その姿が光に包まれた……

第4話 ライダーへの挑戦 その2（後書き）

はい、蟹さん退場です？

そしてあのライダーです。

次回も多分遅くなると思いますが、長い目でお待ちください？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5379u/>

とある鏡中の仮面騎士

2011年12月11日19時53分発行